
The possible world

田無 兼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The possible world

【Nコード】

N9151Z

【作者名】

田無 兼

【あらすじ】

近未来、とある理由によりVR技術の発展した世界。

人は自らの技能すら売り物とし、世界中で日夜売買が行われていた。そこに現れた最新のVRMMOゲーム、「The possible world」

脳内インストール型スキル制を売りとしたこのゲームはまたたく間に世界中で大人気を博していた。

それから2年後、一人の大学生が新たにゲームの世界に入る時物語は始まる。

これは、近未来のネットゲを遊ぶ人々を描いた日常形小説である。

0 話

近未来

認知心理学、人間工学等の様々な分野からのアプローチにより、VR 技術を用いた技能学習方法が実用化された世界。

仮想空間であるVR世界に於いて技能学習を行うと、高効率でその技能を習得出来る。

このような内容の論文が発表されると、世界は一斉にVR技術に目を向け始めた。

そして、様々な問題がありつつも人類はその課題をクリアし、仮想現実による技能学習が一般化され始めた頃、更に新たな論文が発表された。

技能データの脳内インストールによる技能学習法、という論文である。

VR技術が発展していく中で、人は脳のメカニズムを次々と解析していった。

この論文は人の技能学習法の到達地点、技能を直接脳内にインストールし技能を学習させる方法について論じていた。

人々は色めき立った。

自分たちはやりたい事があればその方法を即座に手に入れ、することが出来るのだ、と。

しかし、これには1つの問題があった。

肝心の技能データの取得方法である。

技能データを得る方法は1つだけ。

人間の脳からその技能データを抽出するというものであった。

これの何が問題なのか？

脳内からデータを抽出する際に危険が伴うのだろうか？

そうではない、問題はデータを抽出すると抽出された者からその技能が喪失されてしまうこと。

そして、その抽出されたデータがコピーするたびに劣化していく事である。

だが、それでも好きな技術を極めて容易に習得する事を可能とするこの方法は世界で即座に研究され始めた。

数年後、この技術は確立され世界に広まった。

そして、技能データの市場化が始まったのである。

人々は金で技能を買い、また技能を売って金に換え始めた。

しかし、技能データには限りがあり、データには莫大な値段がついた。

そこで、世界の目は仮想現実での技能学習に向かった。

仮想現実には様々な技能の習得場を用意し、技能を習得し売買を行う。新しいビジネスの形がそこにあった。

そしてその形は次々に広まっていき、それは当然娯楽にも向かった。

VRMMO。

VR技術が発展し確立されたゲーム体系。

そこに登場した最新にして最高の人気を誇るゲーム。

その名はThe possible world。

脳内インストール型スキル制を導入したVRMMO。

これは、そんな近未来における少し変わったネットゲを遊ぶ人々の物語である。

1話

「暇だ」

目を覚まし、30分程ぼうつとしたあとそうつぶやいた。

更に5分程そのまま動かずにいると腹の虫がなった。

その音を聞いたとたんに腹が減った気がしてくる俺の頭は、かなり都合良くできているようだ。

身を起こし、ベッドの足側に配置された冷蔵庫のドアを開け中身を見ると調味料ぐらいしかない。

「そうか…昨日の夜にやけ食いして全部喰っちゃまったんだっただな」

昨日はバイト先に顔を出して辞めると言ってきたのだった。

長く勤めていただけに辞めるのには抵抗があったのだけど、さすがにあんなへマをしてしまうとバイト先には居られない。

「結構給料良かったんだけどなあ」

愚痴りながら部屋備え付けのキッチンまで歩き、炊飯器の中身を確認するとまだ白飯が残っていた。

「よし！」

少しテンションが上がり、冷蔵庫からバターを取り出しスプーンですくいフライパンに乗せ、火をかける。

バターをフライパンいっぱい溶かしながら広げ、ご飯を投入。

ご飯の上に塩こしょうをふりかけ、しばらく炒めた後に醤油を入れ

る。最後にもう一度炒めると特製醤油バターライスの完成だ。

「男が作る適当料理だよな」

苦笑いしながらも香ばしい匂いに食欲がそそり、いそいそと皿に盛りつけテーブルへと持っていく。

「いただきます」

両手を合わせつぶやくと、早速右手にスプーンを持ち食べ始める。食べながら、左手を軽く振ると左手首のDデバイスが光り、左手の先に長方形の立体スクリーンが現れる。そこに左手の人差し指を這わせ、画面をスクロールさせニュースのアプリを開く。

「今日も特に気になるニュースは無い、か」

その後はネットブラウザを開き、いつも見ているサイトを巡回していく。

「しかし…便利なものだよな」

食事を終え、音楽アプリを起動させながら本格的にネットサーフィンを始めた時、ふと思いつ。

今の世の中はDデバイスがあればたいいの事ができてしまう。勿論料理などは無理だが、かつては別々だったというPC、携帯電話、ゲーム機等電子機器の類が全てが集約されているのだ。

といっても俺自身はそれらが別々だった時代をあまり覚えていないのだが。

画面から目を離し、自らの手首にある物を見る。

Dデバイス 正式名称は違はずだが、世間的にはそう呼ばれている機械だ。

電子機器の類のほぼ全てが集約され、更にはVRダイブを行うためになくてはならない物。

VR技術が発展し、各種VR製品を使用するためには必要不可欠であり、全世界でほぼ全ての個人が所持しているといわれているが「実際どんなもんだか。この時代にだって電気を使わない生活してる人も居るって聞くしな」

まあしかし、少なくともこの日本では全国民が所有していると言っても嘘にはならない。

なにせ、今やこれで口座の確認や買い物支払いなどを行えるし、個人判別も行えるので最高峰の身分証明にもなる。免許等もデータで呼び出せるので免許不携帯になる心配も無しと素晴らしい物だ。常に身につける事が習慣化しているため盗まれる事もないし、DNAによる識別があるので他人の物を使う事もできない。最早良いところしかないように思えるが、面倒くさい事もある。

Dデバイスが頭部、両の手首、腰、両の足首の全てにつけなければいけない物だからだ。

「けどまあ、仕方ないよなあ」

これも全てはVRダイブを行う際に身体データを取得するために必要なのだという。

そう言う事もあり、Dデバイスは今では世界中で生産されている。企業により色々の違いがあり、Dデバイスの選び方でセンスを問われる事もある。

俺の場合は実用性を取り、日本製の通信速度とデータ容量に特化したモデルを選んでいる。デザインは黒字にメタリックブルーの線

が入った物だ。ちなみに一月のデータ通信料金は5000円である。

「あ…そうか、こいつの金も考えないと駄目だな」

本体はともかく月々の通信料金、そしてこの部屋の家賃に生活費。今までは全て自分で払ってきた。

その為に結構な時間をバイトに費やし、貯蓄も殖やしてきたのだが…そのバイトは昨日辞めてしまったのだ。

「貯金は…50万か」

銀行口座をチェックし、考え込む。

これだけあれば2ヶ月は大丈夫なはずだ。となれば、その間に新しいバイトを見つけなければいい。幸い今は夏休みが始まったばかりであり、時間はいくらでもある。

「しかし、それで良いのか？」

大学に入って2年目の夏。1年目はバイト三昧だった。来年からは色々と忙しくなるだろう。何かやるとしたら今しかないんじゃないか？

「ふん、ばかばかしい」

一瞬頭に浮かんだものを気の迷いと一蹴する。

今の時代、技能インストール学習法が広まったこの時代ではとにかく金を貯めるべきなのだ。金さえあれば何だってできるようになるこの時代では。

しかし、しばらくバイトをする気になれないのも確かではあった。失敗という物は思う以上に身に伝わる。

気晴らしにネットサーフィンを続けていると、興味を引かれる広告を見つけた。

「目指せ一攫千金、開拓者求む…何だこれ？」

随分と大々的な広告だった。

美男美女が左右に立ち、船に向かって手を向けている絵に大きな文字で誘い文句と共に書いてあるものがあつた。

「The possible world…そうか、こいつが噂のネットゲか！」

『The possible world』

VRMMOといわれるゲームの1つだ。

VRMMOというのは、VR技術の発展により可能となったVR製品の1つで、まあ簡単に言えば仮想現実で行われるネットゲである。

確かThe possible worldは2年前から始まつ

たはずだが、俺はあいにく受験とバイトで縁がなかつた。

ただ、今あるネットゲの中で1番人気があるという事だけは聞いていた。ネットゲに触れない俺がその噂を目にする程なのだから、よほど人気なのだろう。

「なになに、2年連続ユーザー満足度全世界1位、総プレイヤー人口全世界1位、他色々あるな…ん？」

ざっと説明を流し見していると、見慣れない単語が飛び込んできた。

「全世界初、脳内インストール型スキル制を採用。身につけたスキルを売って君も一攫千金を目指せ、か」

脳内インストー型スキル制とは初めて聞く単語だ。だが何となく分かる。これはきつと現実と同じなのだ。

身につけた技能を売り買いする。今の世の中ではそれが可能だ。理屈は知らない。大事なそれはそれが可能という現実だ。

医者になる方法は最早医学部に入るだけではなくなくなった。

医者としての技能データを買い、脳内にインストールすることで、人は試験のみで医者になる事が可能になったのだ。

だが、技能データは有限だ。それゆえ市場では秒単位で値が変わる。

需要と供給を見極めれば、自らの持つ技能を売りさばく事で億万長者になることも夢ではない。

つまりはこのネットゲもそうなのだ。ゲーム内で技能を磨き、それを売る事ができる。

そして上手く売りさばけば

「一攫千金ってわけだ」

ゲームの舞台はファンタジー世界での未開大陸。プレイヤーの目的はその開拓。

ゲームシステムの詳しい内容はゲーム開始時にインストールしてくれる、と。

悪くない。気晴らしになり、更に上手くいけば儲ける事もできるときたもんだ。

何故かは分からないが、かなり乗り気になってきていた。

気が変わらないうちにユーザー登録だけでもしておくでしょう。まずは名前だな。

飛渡
翔一
つと。

2話

「これで終わりかな」

登録完了のメールが届き、一息をつく。

登録が随分細かったため、少し疲れが出た。

「まあ仕方ない事もな」

なにせこのゲームはゲーム内で技能 ゲーム内ではスキルと呼ぶらしいが をやりとりするのだ、嚴重にしすぎて悪い事はないのだろう。

とは言っても、技能の抽出やインストールをするためには必ずDデバイスを紹介事になるし、そこら辺は他人の好きにできないようにDデバイスにセーフティがあるはずなので問題は無いはずだが。

「実際、今までそう言う事故は起こってないようだしな」

技能抽出は本人の意志でしか行えない。Dデバイスに個人認証機能が入っているのもこのためといえるだろう。

もし、他人の手で技能抽出が行えてしまうと危険だからだ。

何故危険なのか。それは抽出した技能は、抽出された人の脳内から消滅するからだ。

仮に「呼吸の仕方」という技能を抽出した場合、抽出された人は即座に「呼吸の仕方」を忘れてしまう。これはどうする事もできない。

だからこそ、技能抽出は本人の意志でのみ行われるし、抽出されたデータとなった技能はあまり多くない。

抽出されたデータの中でも優秀な質を持ったデータは更に少ない。それゆえに、技能データの売買で一攫千金が狙えるのだが。

「まあ子供に買い与えるデータならたいしたことないんだろうけど……」

少し嫌な事を思い出した。

頭を軽く振り、頭に浮かんだ記憶を消す。

「とりあえず、天下のWCDが運営してるんだ。おまけに月額1万、やばい事にはならないだろう」

WCD、俺も詳しくないが多国籍企業でVR技術系の企業の中ではトップクラスの大企業だ。確か社訓が『私達はある！』とかでとにかく何でもやる企業だったはずだ。

「どうせやる事もないんだ、さっそくやってみるとするかな」

ベッドに横になり、さつきDデバイスにダウンロードしたThe possible worldを起動する。

<このゲームはVR製品です。使用するためにはVR空間に行く必要があります。>

<VRダイブしますか？>

<Yes/No>

Yesをタップすると目を閉じる。

すぐに独特の音が聞こえてくる。風鈴のような音だ。それが一定の間隔で聞こえてくる。

これは俺のDデバイスがVRダイブを行う時に鳴る音だ。結構気

に入っている。

そして、段々意識がなくなっていく。風鈴の音が遠ざかっていく。

ふと気づくと、俺はどこかの部屋にいた。

3畳程の広さの部屋で椅子に腰掛けている。

「ここは？」

VR世界に行くのは初めてではない。今の世の中、むしろ行った事の無い人の方が少ないだろう。

VR世界といっても現実と殆ど変わりはない。Dデバイスによる個体認証で身体情報も現実とほぼ変わりがない。違うのはせいぜい身体ダメージを受けても死なないといったぐらいか。

実際に臓器等があるわけではないので死ぬ事はない。だが痛みは感じる。それが何故かと言えば。

「確か、リアリティを保つ必要があるからだったか？」

元々VR技術が発達したのはVR世界で人の技能を上達させるためだとか学校の授業で習った気がする。

その為には限りなく現実と近い状態にする必要があるとか。

「まあショック死はしない程度にリミッターがかかっているから大丈夫なんだよな」

良いながら席を立ってみる。視線の高さはいつもと同じ170センチちよい上。

問題なく身長は同じのようだ。左の壁に掛かっている鏡を見れば、何処にでも居るような顔立ちの男の姿がある。年齢に比べて老けると言われる顔、俺の顔だ。

「そろそろよろしいでしょうか？」
「!?!」

あわてて辺りを見渡すと、正面に女性が立っていた。

美人と呼んで良いだろう。顔立ちはアジア系の中でも日本人に近く、髪と目は黒いが肌は日本人にしてはかなり白い。目はくりっとして大きく、髪は肩までのショートボブ。身長は俺の肩ぐらい。服装は、何とかまさしくファンタジーだ。

全身を金属でできた鎧で着飾っており、腰からは純白の鞆に包まれた剣を下げている。

鎧でよく分らないが、腰つきが色っぽい割に胸はあまり大きくないようだ。

「あの、大丈夫でしょうか？」

「あ、はい、大丈夫です！」

思わず呆然としてしまった。

いきなり美人に声をかけられれば誰だってそうなる…はずだ。

「すみません、いきなりだったからビックリしてしまって…えっと、あなたは？」

「はい、私はTPW、The possible worldの日本地区担当GMの一人、山桜と申します」

彼女はにっこりと笑って告げた。

しかし…GMだって？

「えっと、GMってことは運営の人って事で良いんですよね？なんでそんな人がわざわざ？」

「それはですね、あなたがここに来てからずっと独り言ばかりでキャラクターを始めないからです」

頬を若干ふくらませ、いかにも怒ってますという風にこちらを見る彼女。

それにしてもキャラクター、確かにゲームを始める以上キャラクターは必須だと思うが、始めないとはどういう事か。

「始めないと言われても、やり方が分からないんですが」

無然としながら言うと、彼女は信じられない物を見るようにこちらを見て。

「あの、規約とかはちゃんと読んでますよね？」

「勿論、大事な部分はちゃんと読んでます」

「ではホームページでキャラクターの仕方などは読みましたか？」

「…いや、それは読んでませんが、しかしですね。こう言うのは普通説明がある物では？」

彼女はため息をつき、こちらの手首を指さした。

「ほら、手首のDデバイスが反応していますよね？それを起動してキャラクターを始めます」

あわてて左手首のDデバイスを見ると確かに光が点っている。

普通反応がある時は振動もするはずなのだが、気付かなかったよ
うだ。

「どんだけうつかりさんなんですか、それにキャラクターの仕方ぐ
らいは読んでくるものですよ？」

「お手数おかけしてすいません…」

手首を振り、Dデバイスを起動させると画面が現れ、その中に俺の全身像が映っていた。

<これからキャラメイクを始めます>

<まず種族を決めて下さい>

「種族？」

「…まさか、そこから分からないんですか？」

軽く首をかしげると、山桜さんがおそろのおそろ声をかけてきた。

「はい、どうもそうみたいで…」

「そうみたいって…はあ、分かりました。軽く説明させて貰います」

彼女は軽く首を振ると、右手を大きく振った。

彼女のうっすらとピンク色をしたDデバイスが起動し、大きな立体スクリーンが現れる。それを彼女は指で操作し、しばらくして画面をこちらと共有設定にして見せてくれる。

そこには5つの人らしき姿が映っていた。普通の人、何か頭に耳が生えててしっぽもついてる人、耳が長い人、えらくでかい人、えらくちつこい人の5人だ。

「TPWの世界にはかなりの数の種族が存在します。しかしプレイヤーが使用出来る種族は人間、獣人、妖精人、巨人、小人の5種類。更に巨人と小人には身長制限が存在します」

「身長制限ですか？」

「はい、VR世界では当たり前前なのですが、プレイヤーとキャラクターの身体能力は同じになります。これは現実と仮想現実で違和感

の無くすためですね。その為、巨人種族は身長250cm以上、小人種族は身長145cm以下と定められています」

「それはまた…随分と厳しい制限ですね。特に小人なんか、昨日145cmでも今日は146cmに成長してた、なんてこともあり得るんじゃないですか？」

「はい、その場合はゲームをする事はできません。その為小人種族になられる方は非常にまれです」

なるほど、5種類とは多いと思ったが、自動的に2つは消えた。残り3つなわけだが。

「えっと、人間はともかく獣人と妖精人について教えて欲しいんですが」

「獣人は見ての通り、動物の特徴が付与される種族です。何の動物になるかはランダムですね。妖精人は耳が長く、線が細くなります。」

「はあ、見た目の違いは分かりましたが、身体能力としての違いはどんな物なんでしょう？」

「ありませんよ」

あっけらかんと言う彼女に視線を合わし。

「無いんですか？」

「無いですね」

「じゃあ何のために仕様種族が用意されてるんですか!？」

意味が分からない。能力に差がないなら種族を選ぶ必要なんて無いじゃないか。

「んー、そうですね。一番の理由はやはり選べる種族が1つじゃつ

まらないでしょう?」

「そりやまあそうですね…選んでも違いがないんじゃない?」

「まあまあ、そうあわてないで下さい。ちゃんと種族間に差違はありますから」

あるのかよ!

思わず頭の中で突っ込んでしまった。

しかし、身体能力に違いがないなら一体何に差違ができるっていうんだ?

いいですか?と彼女は人差し指を立ててノリノリに解説してくる。

「そもそも種族間に差違がないのはこのゲームの肝である脳内インストール型スキル制を生かすためではあるんですが、それを説明すると長くなるので止めます。とりあえず覚えておいて欲しいのは1つ。種族によつて装備出来る物とできない物がある、という事です」
「装備:ですか」

「そうですね!このゲームでは装備はとても重要なファクターを持っていると言つて過言ではありません。ですので、種族を選びはそこ重要なんですよ?」

ふむ、確かにそうなると種族選びはかなり大事だな。

「じゃあ種族によつてどういう物が装備出来たりできなかつたりするんです?」

「そうですね、獣人なら金属製の防具などは装備出来ませんし、妖精人は更に革製も駄目ですね。妖精人はおまけに近接系の武器にも装備の制限があります」

「制限ばつかじゃないですか」

「いやいや、その代わりに妖精人は魔法系の装備に制限がありませんからね。魔法使いになるなら妖精人はかなりオススメですよ!」

「魔法使い…ですか？」

きよとんとして山桜を見つめると、彼女の方もこちらを見つめてきて。

「ええ、魔法使いですが…どうかしましたか？」

「いや、魔法使いなんてなれるものなのかと思ひまして」

VR世界は技能学習のために発展した。それゆえにVR世界では現実でできない事はできない。これがVR世界の常識である。

実際、魔法を使えとか言われても全く想像出来ない。

「ああ、そうですね…厳密には魔法使いとちよつと違うわけですが」といふと？」

「さつきも言ったように、VR世界であってもプレイヤーとキャラクターの身体能力に差はありません。だから、物語にあるようなMPなんてものもあるわけがないんです。そのため、この世界は魔法が使える装備という物があります」

「魔法が使える装備？」

ちよつと分かりにくいですね、と彼女は笑いながら説明を続ける。

「現実世界の銃みたいな物ですよ。例えば炎の杖というアイテムが合ったとします、その杖特有の発動動作を行えば炎を敵に向かって放つ事ができるというわけです」

「ああ、なるほど、確かに純粋な魔法使いでは無いですね」

「はい、この様にTPWではアイテムに様々な能力が付与されます。それを使う事で現実には不可能な事も可能となるんです！」「だから可能の世界、なのか…分かりました」

色々と納得がいった。

しかしそうなるとますます種族選びが重要になってきたな。顎に手を当て、どれにするか悩む。しかしこれといったものがない。逆に言えばどれも面白そうな気はするしな。

「特にこれがやりたい、といったものがなければ人間を選ぶのが良いと思いますよ」

迷っている俺を見かねてか、彼女が声をかけてきた。

「それは何故でしょう？」

「人間種族は他の種族に比べて装備の制限が圧倒的に少ないんです。だから人間種族なら色々な事をとりあえず試せると思いますよ」

「はあ…しかしそれじゃみんな人間種族を選ぶんじゃないですか？」

いくら見た目がいつもと変わらずつまらないといっても、人間だけそんなに優遇されていれば皆人間を選ぶだろう。

そんなこちらの思いを知ってか、それはですね、と山桜が説明を始める。

「人間は確かに装備制限が少ないんですが、逆に専用装備も圧倒的に少ないんです」

「専用装備？」

また新しい単語が出てきたぞ。

「専用装備というのは、そのまま種族専用の装備の事です。人間専用とか獣人専用とかですよ」

「そんな物まであるんですか」

「まあ、まだゲーム内でも数えるくらいしか見つからない物で

すが、比率から言って人間種族専用の装備が少ない事は確かですね」
なるほど、人間は確かに汎用性はあるかもしれないが、最終的に
上に向かうなら違う種族の方が良いのだろう。

さて、今まで出た情報を踏まえて俺が選ぶ種族は…

「よし！」

そこから更にしばらく考え、結論を出した俺は自らのDデバイス
画面を操作した。

軽い音と共に画面に文字が現れる。

<種族選択>

<人間種族が選択されました>

<次の選択肢へと移行します>

3話

「人間で良かったんですか？」

こちらを見ていた山桜さんが声をかけてくる。

「ええ、そもそもゲームの内容もあまり調べてませんし、それならできる事が多い方が良くと思いますよ」

それに元々長く続けるつもりではないのだ。あくまで夏休み中の暇つぶし。ついでに儲けられたらラッキーといったところだろう。そんな事よりも気になる事がある。

「あの、付き合っていたいてありがたいんですが、良いんですか？」

「ああ、大丈夫ですよ。今丁度昼休みなので」

「その、余計に申し訳ないんですが…」

まさか昼休みだったとは。

時計を見れば確かにそんな時間だ。しかしこれ以上付き合わせるのはさすがに申し訳ない。

「あの、ここから先は一人でやりますので、大丈夫ですよ」

こちらの言葉を聞いた彼女は、少し考えるそぶりをした後こちらにほえんだ。

「折角なのでキャラメイクだけでもおつきあいしますよ。これも御仕事ですから、気にしないで下さい」

美人が笑うと破壊力がでかいが、仕事だからと聞いて少し冷静になれた。

そう、向こうも仕事だ。月額1万円はでかい。どうせなら向こうだって長く続けて貰いたいものだろう。

「ではお言葉に甘えて…次は外見ですか」

<外見を決定します>

<髪型を指定して下さい>

Dデバイス画面には、新しい文字と共に無数のサンプル画像が浮かんでいた。

「さっきプレイヤーとキャラクターに身体能力の差はないって言ってましたけど、外見とかは変えても良いんですか？」

「はい、勿論そのままでも大丈夫ですけど、やはり仮想現実ですから、普段とは違う自分になりたい方が多いですね。身長と体重は変えられませんが、髪型や顔、髪や目、肌の色とかも変えられますし、外見だけでもがっしりさせたりとかもできますよ」

なるほど、外見を変えるだけなら自由自在というわけだ。

しかし、そこまで変える事ができるんだな。VR世界では違う自分になる事ができるとは聞いていたが、今までそう言うサービスは受けた事がなかったし。

「あれです、別のサービスで使ってるアバターがあれば、それを使う事もできますよ?」

「残念ながら持ってないんですね。しかしこれ1から考えるのはめんどくさいですよね…」

「一応そういう人のためにサンプルアバターがありますけど」

そういつて彼女が指し示した部分には完成されたキャラクターが何人も並んでいるが。

「どれも俳優みたいな奴ばかりだな…」

一般的に格好いいといわれるような容姿ばかりだ。この中から選ぶのもなんだかためらわれるな。

そこからいくつか適当に作ってみたものの、これというものができない。

山桜さんも側でニコニコと笑ってくれているが、若干呆れ気味のご様子だ。

10回目のキャラをデリートしたところで決心をする。もうめんどくさいしいいや。

画面をスクロールし、変更無しのボタンを押す。

< 外見の変更無しを選択 >

< 最終確認へと移行します >

「良いんですか？もしかして私急かしてしまったでしょうか？」

驚きながら山椿さんがこちらへ話しかけてくる。

申し訳なさそうな顔を見るとこっちの方が申し訳なくなってしまふ。

実際にこっちが面倒くさくなっただけだ。

「いや、そんな事ありませんよ。現実そのままの人って珍しいんじゃないかなと思ってやっただけですから」

そういえば、話をそらすついでに気になってた事でも聞いてみるか。

「あの、このキャラメイクって別に現実世界でもできますよね？何でわざわざこっちでやるんですか？」

現実世界でやっていれば恥を掻く事も、山桜さんに迷惑をかける事も無かつたろうに。

まあこんな美人と話せたのはラッキーだったけど。

ああ、それはですね、と彼女は笑顔になって話し始める。

「もう少ししたら分かりますよ」

曰くありげに微笑んでくる彼女。しかしこの人は笑顔が似合うな…と！？

突如身体が輝きだし、視界が白く染まる。

「何だつてんだ！？」

地味に焦ってしまったが、光は一瞬で収まった。一体何が？

「あちらをどうぞ」

彼女の手が向かう先には、さっき見た鏡が…っておお。

「姿が…変わってる！」

といってもキャラメイクで外見を変えなかったので、殆ど変わりはない。

服が17世紀のヨーロッパみたいな布の服に、革の靴へと変わっていて、ぶつちやけかなり似合っていない。

あとはDデバイスが消えている。いや手首に1つだけになっている。

「なるほど、まあVR世界でVRダイブする事は無いし、手首のデバイスだけで十分だよな」

「なんだかあまり驚いてませんね…」

まあ、こんだけ変化がなければ驚きはしない。

しかし、彼女がさっき言っていた事が分かった。

「つまり、これが最終確認で、実際に外見を変えていやだったらやり直せる、と」

「ええ、試着ならぬ試アバターってやつですね！」

上手い事言ったといわんばかりに自慢げな顔を見せてくる。

…何を言えばいいか分からない。

彼女もそれに気付いたのか、一度咳払いをするとこちらを見る。

「それで、どうですか？今ならまだ変更可能ですよ」

もう一度、鏡で自分の姿を見る。

やはり服が壊滅的に似合っていない気がするが…

「あの、ゲーム内には和服とかあるんですか？」

「え？どうですかね…あるんじゃないでしょうか。無くても誰かが作ってそうですし」

作るってのがどういふ事は分からないが、おそらくゲーム内で

自由に服が作れるのかもしれない。

まあ似合って無い気がするといっても飽くまで気がするだけ…大丈夫だろう、きっと。

心を決めてデバイス画面を操作する。

<最終確認>

<キャラクター外見はこれでよろしいですか？>

<Yes/No>

Yesを押すと、また画面が切り替わる。

<キャラクター外見の作成を完了しました>

<最後にキャラクター名を入力して下さい>

むむ、名前か…どうするかな。

「ハンドルネームとか持ってないんですか？」

山桜さんが悩み始めたこちらを見て、訪ねてくる。

ハンドルネーム、持ってないな。

ううむ…今までで一番悩んでる気がするぞ？

「思いつかない時は自分の名前をもじってみたらどうですか？」

「名前をもじる…ですか」

「ええ、自分の名前を使うとキャラに愛着が持てますから、かなりオススメですよ！」

そういう物だろうか？むしろ恥ずかしい気もするのだが。

「じゃあ山桜さんも？」

「あ、いや私の場合は合ってるような合っていないような…」

もごもごと口ごもってしまった。どうしたんだろうか？

まあしかし、ここまで付き合って貰った山桜さんのお薦めだ、名前をもじってみるとすると…

うん、これでいくとしよう。

<キャラクター名入力>

<カケル>

我ながら安直だ。翔一の翔をかな読みしてかける。だがまあ、安直ながら良い感じなんじゃないか？

「カケルですか、格好いいお名前ですね」

そういつて微笑まれると、お世辞と分かっているも照れてしまう。照れ隠しに画面を弄り、名前の確認も完了させる。

<これでキャラクター作成は終了です>

<お疲れ様でした>

<続けてゲームの簡単な説明を行います>

<扉を開け部屋から出て、外の者の指示に従って下さい>

これでやっとキャラ作成が終わったわけか…長かったな。

「お疲れ様でした」

山桜さんの方を見やると、彼女が会釈を言った。

「私も昼休みが終わるので、そろそろおいとまさせていただきます。次の説明はとも大事ですからしっかり聞いて下さいね？」

「あ、その、色々と教えて貰ってありがとうございます！御座いました！」

あわててこちらも会釈すると、彼女は笑って手を振った。

「それではThe possible worldをお楽しみください。この世界はただのゲームですが、きっとあなたにとって忘れられない世界になる事でしょう。それだけの価値があると自負しますから」

ではまた会いましょう、といって彼女は光に包まれ消えていった。おそらくログアウトしたのだろう。

初っぱなから色々と大変だが、しかしやる気はまったく減っていない。

「それどころか、どんどん溢れてきてる」

ほんの少しとはいえゲームの情報を聞いた。たったそれだけなのにワクワクしてくる。

「こんな気持ち、随分と忘れてたな」

何時以来だろう。きっと中学のあの時以来だ。

山桜さんが最後に言った言葉が頭に響く。

あれは本当だろうか。さすがにただの宣伝だろう。けれども、

「本当であればいい。あれだけ自信満々だったんだ、期待させてもらっせ？」

誰に言つでもなく言葉を口に出し、俺は部屋の扉をゆっくりと開けていった。

4話

扉を抜けた先は廊下のようだった。

左右を見ると、左は行き止まり、右には廊下が続き、扉が等間隔で並んでいる。そして突き当たりには

「階段…か」

どうするべきなのか、と考えていると、階段の方から声が聞こえてきた。

「おい、そこのお前！もうすぐ訓練が始まるぞ。さっさと上がってこい！」

訓練？どういう事だろうか…少し思いにふけり、答えを得る。

これはおそらくだが、もうゲームが始まっているのだろう。

確かゲームは冒険者が大陸に着くところから始まったはずだ。つまり訓練とは大陸に着く前のゲーム説明のことなのだろう。

「さてさて、どんな訓練が待っているのかね」

顔に笑みを浮かべながら、足を声がした方へと進めていく。

階段を上り、目の前にあった少し変わった扉を開ける。

まず目に入ったのは青い色。そして特徴的な匂い。

「海…だって？」

そして気付く。今自分が出てきたところが船の甲板だったという

事に。

「おかしい…揺れなんて感じなかったし、今も感じないぞ？」

「それはだな、揺れると訓練の邪魔だからだ」

振り向くと、先程の声の主がいた。

筋骨隆々とはこういう人の事をいうのだろう。がっしりとした体つきがタンクトップと短パン越しにでもよく分かる。

太い眉と鋭い目は威圧感を感じさせ、俺よりも頭1つ大きい身体も相まって結構怖い。

「良く来たな、新たな冒険者よ。名前はカケルであっているな？」

ニヤリ、としか言い様のない顔つきで笑う男。うん、かなり怖い。

「おい！あっているのか！？」

「は、はい！あってます！」

よしよし、と満足そうな顔つきで頷くと、こっちへ来いと手招きされる。

逆らうのはまずいと本能が感じ、男について行くと、さっきまで気付かなかったが数人の人影があった。

人ではあるが、人間ではなかった。

おそらく獣人だろう人が2人、あとは妖精人が1人に小人が1人。

「って小人？」

そう、小さな身体にとがった耳は、先程山桜さんに見せて貰った小人の姿に似ていた。勿論各部が違うがそれは微々たる差でしかない。

なる人はまれだと聞いていたが、こんなに早く見る事ができるとは。

銀髪の髪をポニーテールでまとめ、凜とした顔立ちと力強い目つきは綺麗な前に格好いいと言いたくなる。最も、身長はかなり小さいわけだが。体つきからは男か女か判別はできない。

「何よ、人の事じろじろ見て。そんなに珍しい？」

どうやらマジマジと見てしまっていたらしい。小人の人からジト目で見られてしまった。

急いで手を振り何でもないとアピール。

しかし、声からすると女性だろうか。ソプラノの良く通る声だ。

いや、もしかしたら声変わりしてない中学生かも。この身長は大体それぐらいの歳だろう。

更に小人が何か言おうとした時、さっきの男が声を発したのでそちらを向く。

助かった。

「さて、今回はお前達5人が同じタイミングでキャラメイクを終えたので、一緒に訓練させて貰う。俺はインストラクターの鬼灯だ、よろしくな」

右手を握り、親指を立ててのサムズアップ。はっきり言って見るのは初めてに近いポーズだ。

他の人達も何も言わずに鬼灯の方を見ているだけだ。気まずい。

うおっほん、と大きく咳払いをし、鬼灯は話し始めた。

「これから、お前達に大陸を開拓する上で必要な事を教えてやる。向こうでのたれ死にしたくなかったらしっかりと聞いておけ。更に今回は少しなら質問にも答えてやれるぞ」

「今回はってどういう事ですか？」

あの外見に全く怯えず小人が質問する。

いやまあ話し方はそんなに怖くなかったけど、あの外見だからなあ…

「いい質問だ。まあ気付いてると思うが、俺はNPCじゃない。所謂GMってやつだな。ふつう訓練はNPCが個々人に行くんだが、たまにGMが行う時があつてな。それが今回つてわけだ。運が良いぞお前達！」

がはは、と豪快に笑う鬼灯。しかしGMだったのか。そりゃそうか、NPCにしては動きが細かいと思つたんだ。…他のゲームのNPCがどんなもんか知らないが。

小人も納得したのか、分かりましたといつて下がった。他の人達もGMが教えてくれると分かつてテンションが上がっているようだ。では始めるぞ、と鬼灯が説明を始める。

「まず分かつてると思うが、お前達冒険者の目的はこの船が向かつている大陸、セントレイル大陸の開拓だ。しかし、あの大陸はまだ未開の土地ばかりであり、開拓された場所も完全に安全とはいえない。野生の獣たちが襲いかかつてくる事もあるし、森はお前達が思っている以上に迷いやすい天然のダンジョンだ。そしてお前達が見た事もないモンスター、亜人もや食人植物など危険が溢れかえっている。だから！ここで最低限、身を守るための方法をお前達に教えておく」

彼はゲームの事とは思えない程真剣に話し始めた。

彼の放つ威圧感と雰囲気、自然と皆話を真面目に聞き始める。なるほど、ゲームの説明をここまで真面目に聞かせられるんだから、

この人はきつと説明がとても上手いに違いない。

俺も他の人達同様、説明に聞き入る事にした。

皆の雰囲気を感じとったか、鬼灯は、いや、鬼灯さんはまたニヤリと笑った。

「まあ、そこまで堅くなるな。しかし、真面目に聞いておけ。そうすればきつとお前達はこの世界を楽しむ事ができる。俺の同僚がよく言っているが、お前達にとって忘れられない世界になるさ、ここはな」

さつき同じ言葉を聞いた気がする。なるほど、山桜さんもGMだし鬼灯さんと同僚なのだろう。

「さて、さつきもいつたがこの世界は危険が山程ある。それに対してお前達は素人だ。中には素人じゃない奴もいるかもしれないが、基本的に素人だろう。そんな素人がこの世界で生きていくにはどうすればいいのだが、一番大事な事はこれだ」

一息ためを作って彼は言う。

「頑張れ」

揺れないはずの船が揺れた気がした。

周りを見ると誰も彼もが呆れたような顔をしている。曰く、何言っただこいつ、と。

その様子を見ても彼は全く動揺せず話を続ける。

「お前ら全員、何言っただこいつでも言いたげだな。そう思うのはよく分かる。今のは心構えの問題だが…この世界を楽しむ上で一番大事なことだ。覚えとけよ」

頑張れ、か。

そんなものは何にだって言える事だ。どんなゲームだってそうだし、現実が一番頑張らなきゃいけない。そんな、何処にでもある言葉が頑張れ、だ。

ふと、隣の小人が何か言った気がしたが、横を見ても特に何もなさそうだった。

「とはいえ、頑張れだけじゃ物足りないだろうからな。ここは一つこの世界のやり方を見せてやろう。おい、そこのお前！」

「俺、ですか？」

「そうだ、お前だ。ちょっとこっちに来い」

いきなりの指名に困惑しつつ前へ出る。

次の瞬間、俺の目と鼻の先に鬼灯さんの拳があった。

「…っ？」

何もできず、拳が目の前に来てからやっとな動こうとする。拳のせいかは分からないが、顔にかすかな風が当たっていた。

早い。見る事はできても動く事はできなかった。

想定してなかったせいもあるだろう、だが、仮に来るのが分かっていたとしても反応出来るだろうか。

あいにくと俺は素手での喧嘩なんてした事がない。いきなり殴りかかれても、どうすればいいか全く分からない。

「つとまあ、今のお前達だところなる。いや、喧嘩なれしてる奴はもうチヨイと動くがな？普通に生活してたら今のパンチには棒立ちになるしかないわな」

「はあ…そうですか」

フォローされてるんだろうが、後ろの人達の視線が怖い。
恥ずかしくて振り向けないぞ、畜生。

「普通に生活してたら、今のパンチに出会う事はそう無い。だが、ここではそうじゃない。野生の獣は今ぐらいの攻撃なら普通にしてくる。それじゃあお前はどうすればいいのか、おとなしくやられるしかないのか。そんな不可能を可能にする方法がこの世界には存在する」

「それは…?」

いや、分かってるんだが、聞かなきゃいけないような雰囲気が出てしまっただな。

鬼灯さんは待ってましたとばかりに破顔し、答える。

「それがスキルのインストールだ!」

スキルのインストール。このゲームが今、世界中で人気である理由の最たるもの。脳内インストール型スキル制。

この部分だけはホームページでもしっかりと読んだ。

この世界で言うスキルとは現実での技能の事だ。技能とは歩くといった基礎的なものから、スポーツといった複雑なもの、とにかく無数に存在する。

今の世界はこの技能を技能データとして脳内から抽出し、別の人間の脳内にインストールする事でその技能を移し替える事ができる。よって高ランク、質の高い技能データは莫大な値段がつく。

低ランクの技能は高ランクに比べれば、頑張れば手が届く値段で取引されているが、そんなもの買っても大して旨みがないので、脳内インストールを経験した事がある人間は珍しい部類に入るだろう。

「さあ、こいつをくれてやる。早速やってみる！」

そういつて鬼灯は右手の黒い、手枷のようなDデバイスを起動し操作する。

すると俺のDデバイスにデータが送られてきた。

右手を振り画面を開く。

<鬼灯からデータを受信しました>

<スキルデータ『回避』：ランク1が存在します>

<インストールしますか？>

<Yes/No>

技能のインストール…いつか絶対にしてやると誓った。その為にバイト漬けの青春を過ごした。それが、

今日の前にある。

ランク1、大したものじゃない、だが…

<『回避』：ランク1をインストールします>

風鈴の音が、聞こえた。

視界が、暗くなった、気がした。

…何かあったか？

「おう、目が覚めたな」

目の前には、さっきと変わらず鬼灯さんの姿がある。
何も変わってない？

「あの、今一瞬目の前が…」

「ああ、お前は今5分間眠っていたからな」
「眠っていた…?」

そうだ、と鬼灯はうなずき。

「スキルデータをインストールする際、ランク×5分間眠る事になる。寝ている間にスキルをインストールするわけだ。だからほら、後ろを見てみる」

言われて振り返ると、そこには立ったまま目を閉じている他の4人の姿があった。

いや、なんて言うか、凄い無気味だ。

あ、しかし小人の寝顔は凄い可愛いな。さっきまで強気な感じの顔だったからギャップらしきものが。立ったままでなければ、尚良かったんだが。

っと、あんまり寝顔を見るのは良くないな。

「しかし、そうならそうと言って欲しかったんですが」

「いや、言わない方が面白いかと思ってな。実際ビツクリしただろっ?」

その言葉と同時に、鬼灯さんが右の拳を放つ。

見える、と同時に今度は身体が動いた。自然に左足で地面を蹴って右へ。

拳は俺の顔のすぐ横を、風圧を感じさせながら通り過ぎていく。

「って寸止めじゃないんですか!?!」

「いや、避けられるはずだから良いかと思っただけ」

「そりゃ避けられましたけど!?!…って、え?」

避けた。今自分は確かに避けた。

それだけじゃない、どう良ければいいかが頭の中にあり、俺の身体がそれをしっかりと再現していた。ごく自然に。

「これが…スキルのインストール？」

「そうだ。そして、それこそがこの世界を生きていく際に活用出来る、便利な道具ってわけだ」

何度目か分からないニヤリ顔に、更に自慢げな顔を足して鬼灯さんは笑った。

5話

その後、起き出した他の人達も鬼灯さんの洗礼を受け、ある人はしきりに興奮し、またある人は不思議そうな顔をしたりと色々だった。

「さて、全員スキルインストールがどんなものか分かったな？こいつを忘れるな。この世界ではこいつが常につきまとう事になるからな」

全員の顔を見渡し、満足したのか彼は大きく頭を縦に振った。

「さて、さつきお前らにくれてやったスキルデータだが、手に入れる方法は簡単だ。街に行つて買う、これだけだ」

「買う、んですか？」

「そうとも、現実と同じさ、これは。街に行けば各種ランクのスキルデータが売ってるし、その中には各人の身体能力に適合したスキルデータがあるはずだ。低ランクなら数が多いからなおさらだな」

あの、と獣人の男が遠慮がちに鬼灯さんに声をかける。

「身体能力の適合って…なんですか？」

「そうか、ここは知つとかないとまずいところだからな、知らないなら全員良く聞いておけ」

いいか、と言い聞かせるように彼は言う。

「スキルデータってのは、元は人間から抽出されるものだ。だから、

同じランクのスキルデータでも、抽出された人間によって内容が異なる。勿論、同じランクなら技能的には大差ない。だが、同じ1ランク回避スキルでも身長200cmの奴から抽出された回避スキルと、身長150cmの奴から抽出された回避スキルじゃあ避け方が全然違うつて分けだ」

これも現実と同じだ。ここら辺は、技能データのことを詳しくない知らない事だろうな。

そういった事もあって、技能データにはランクと同時に抽出者の身体能力が併記される事になっている。

これを偽装したりすると重大な犯罪だ。

何せ、1度インストールした技能は元々自分にあったその技能と混じり合う。その結果身体能力の差によって技能がなじまず、技能を抽出する事になった場合

「元からあった技能も抽出され、脳から消えてしまう」

身体能力の差も、少しなら問題は無い。が、さっきの例のように身長が50cmも違えば色々大変な事になるだろう。

しかし、この世界にはそんなに無数の技能データ、スキルデータが存在するのか？

各人のニーズにあったデータが都合良く存在する。にわかには信じがたい話だな。

「どうやら、知ってる奴は信じられないって顔してるな。だから教えてやるが、お前らが考えているとおり、そんなに都合の良いスキルデータがいっぱいある分けじゃない。だが、この世界ではスキルデータの買い取りとコピーによってできる限りのスキルデータをそろえているのさ」

スキルデータの買い取りとコピー。

この話が出たとたん、雰囲気が変わった奴が2人。

さっき質問したのは違う獣人の男と妖精人の女だ。

「お前らも宣伝の広告ぐらいなら見ただろう？俺たちはお前達冒険者からいつでもスキルデータを買い取っている。しかも、それはこっちの金だけじゃない、お前達がよく知っている世界の金でも買い取っている。だから、俺たちの元にはスキルデータが集まってくるし、それをコピーして増やしている。お前達も要らないスキルデータは売ってくれて構わんぞ？」

「しかし、さっきの話ではスキルデータは買う必要があるんですよね。それを売ったのではこちらには赤字しかないんじゃない？」

最初に質問した獣人がまた質問をする。

それにそんな事も知らないのかという目をするもう一人の獣人と妖精人。

いや、そこまで馬鹿にする事無いんじゃないか？

俺も知らないし。

「良い質問だな。スキルデータは買わなければ手に入らない。それは変わらないが、1つだけ勘違いがある。スキルデータを買うのに必要なのはこの世界の金だけ？」

それに、と鬼灯さんは言葉を続ける。

「スキルデータは、ランクが高ければ高い程高値で売れる。そして、スキルを高ランクにする方法はなにもデータを買うだけじゃない」「その方法は…なんですか？」

その言葉に鬼灯さんは身体の前で左の掌に右の拳を打ち付けて言う。

「鍛錬だ！」

鍛錬、つまり鍛えろって事か。

鍛える…か。

「鍛錬し、訓練し、実戦しろ。そうすればお前達のスキルランクは絶対に上がる。そしてそれからどうするかは…お前達次第だ。もちろん、どうやってスキルランクを上げるかもな」

そこで鬼灯さんは口を閉じ、俺たちを見た。

どうやって上げるかは俺たち次第。

金か、鍛錬か、悩む必要もないような事だ。どっちが楽かなんて一目瞭然だろう。

そうとも、決まり切った事だ。

「自分のスキルがどの程度のランクか知りたかったら、Dデバイスを開いて知りたいスキル名を検索してくれ。そして最後に言っておくが、このスキルはお前達の頭に存在するもんだ。だから、この世界で得たスキルはお前達の世界でも問題なく使える」

「そうなんですか？」

「ああ、だからお前達の世界で鍛錬すればこっちの世界でも無駄にならねえ」

さて、と鬼灯さんは後ろを向き、少し離れたところに置いてある、えらくでかい袋を取ってくる。

そして袋を逆さにして中にあるものを床にぶちまけた。

大剣、杖、腕輪に服など他色々。これはもしかして。

「さあ、こいつが何かは分かるだろう？さっきも言ったように、お前達はみんな素人。いくらスキルインストールがあるからといって、最初から高ランクのスキルを買うのは懐具合を考えても難しいってもんだ。そんなお前達がどうやって凶暴なモンスター達に対抗するか。その答えがこいつらアイテムって訳だな」

言いながら、鬼灯さんは床にある杖を拾い上げた。

「こいつは炎の杖だ。魔法系の装備では1番低ランクの武器だな。ぱっと見はただの杖だが、こうすると」

彼は杖を横に構え、左から右へと大きく振り、そのまま流れるように杖の先を頭上に持っていく。そしてそのまま振り下ろすと同時に言葉を発する。

「炎よ！」

その瞬間杖の先から炎の塊が現れ、炎塊は真っ直ぐに進み、そのまま船外へと消えていった。

俺たちは皆、その光景を呆然と見つめていた。

この瞬間だけは、ごつく、むさ苦しい鬼灯さんの姿が神秘的な、魔法使いのように見えた。

「とまあ、こんな風に魔法が使えるって訳だ。ちなみにこの世界は今のようには特殊な動作に発声を加える事で魔法を発動出来る。これら一連の動作を合わせて魔法スキルと呼んでいるな」

杖で床に突き、俺たちを見回す。

「この世界はアイテムに様々な特殊効果が付いている。だからアイテムを上手く使えば開拓を有利に進める事ができるだろう。ただし……」

「ただし…なんですか？」

もう獣人君は質問役が板についてるな。俺が質問しなくて良いので素晴らしく楽だ。

「この世界のアイテムは条件を満たしていなければ装備する事ができない。例えば、この大剣だが、おいフランベルだったな、持つてみる」

鬼灯さんは床の大剣を指さし指示する。すると隣の小人が前に出て大剣を持ち上げようとす。

なるほど、あの小人がフランベルか。

しかし妙だな。あの大剣全く動かないぞ。

彼女が大剣を持ち上げようと、全身を使って頑張っているのだが、持ち上がるどころかピクリとも動かない。

「そこまで、もういいぞ。何故フ、ランベルがこいつを持ってなかったか。それは力がなかったからじゃない。こいつは妖精人と小人が持てないように制限されてるからだ。そして、カケル。こいつを持つてみな」

今度は横にある槍を指さし、俺に向かって言った。逆らう気もないので、俺は素直に槍を持つととする。

人間種族は装備の制限が少ない。しかも槍なんてポピュラーな武器が制限されてる筈もなく、簡単に持ち上が…持ち上が…らない！？

床を思い切り踏みしめ、引っ張るように持ち上げようとするが、槍は全く動かない。

どうなってる!?

「よし、やめろ。さて、今度はカケルが槍を持ってなかったわけだが、今度は装備制限のせいじゃないぞ。人間種族は制限が少ないからな、この槍も勿論人間種族に制限は入っていない。では何故持てなかったか分かるか?」

「それは、そのカケルさんの体力が足りなかったからでは?」

妖精人の女性が情け無さそうな目でこちらを見てくる。

おい、ちよつとイラツとくるんで止めてもらえないかな?

視線で通じたのかそうでないのか、彼女は興味なさそうに鬼灯の方へ向き直った。

獣人2人が気の毒そうな顔でこちらを見る。同情は要らないがありがとう。

ちなみにフランベルはこちらを見ようともしない。

「足りなかったのは体力じゃない。足りなかったのは…スキルランクだ」

こちらを見てニヤリと笑う。段々この笑い方には慣れてきたぞ。

「この槍は、装備するのに槍スキルのランクが5以上必要な槍だったのさ。この様に、アイテムは種族制限だけじゃなく、ランク制限も存在する。勿論強いアイテム程高ランクのスキルが必要になるってわけだな」

種族制限とランク制限。これはちゃんと覚えとかないとな。

恥をかかされたせいで、むしろ忘れられない気もする。

「アイテムは、見ただけじゃどんな効果や制限があるかは分からない

い。店売りなら店主に聞けば教えてもらえるが、外で見つけたようなものは、本で調べるか、知ってる奴を捜し出すかするしかないな」「外で見つけるといふのは？」

「宝箱だったり、お前らのお仲間が落としたものだったりだな」

仲間が落としたもの？

どついう事だ？

「どついう事ですか？」

良く聞いてくれた、獣人君。

「お前達がアイテムを落とすパターンが何種類がある。単純に気付かずに落とした、荷物が持てなくなったので捨てた、などがあるが、一番多いのは…死んだ時だ」

「死んだ時、ですか」

「そうだ。この世界は死んでも、指定されたホームポイントに帰還する事になるだけだ。スキルのランクが下がったりはしない。だが…持っているアイテムは全てその場に落とす事になる。お金も装備品も、死んでも落とさない効果のあるアイテム以外は全部だ」

きつい、な。

ホームポイントの近くならともかく、ダンジョンのど真ん中で死んだりしたら取り戻せそうにない。

「だから、なるべく死ぬな。危ないと思ったら、さっさと逃げろ。良く言う言葉だが、まだいけるはもう危ないってやつだな。さて、これで俺からの訓練は終わりだ。何か質問はあるか？」

「ひとつ、質問があります」

フランベルが手を挙げ、鬼灯を見る。

「何だフランベル。言ってみろ」

「ありがとうございます。先程、外でもアイテムを見つける事があ
ると言っていましたけれど、外で見つけたアイテムが制限で持てな
かった場合は、諦めるしかないのでしょうか？」

確かに、それは気になる内容だ。

外で見つけるアイテムは、冒険者が死んで落としたものが多い。
とすれば、結構な掘り出し物の可能性も高いし、ランク制限の高い
アイテムも多いだろう。なら、出来る限り持って帰って売りたいと
ころだ。

「良いところに気がついたな。これは本来チュートリアルでは教え
ないんだが、質問には答えると言っていたし、教えてやる。制限に
より持てないアイテムも、直接触れなければ持つ事はできる。但し、
持っても何とか運べる程度の重さだから、振り回したりはできない
がな」

「しかし、それでは結局それ以外が持てなくなってしまつて意味が
無いのでは？」

「そんな事は無いぞ？ま、これ以上は自分で考えるか調べるんだな」
「…分かりました。ありがとうございます」

フランベルは不満げな顔をしつつも、幾分か納得した様子で下が
った。

しかし、今の情報はかなり大事だな。まあ、鬼灯さんが言ったよ
うに、調べれば分かる事なのかもしれないが。

「もう質問はないか？」

最後の確認とばかりに鬼灯さんが皆の顔を見渡すが、特に誰も声を上げない。

俺も特に質問はない、はずだ。

「よし！それでは最後に、これだけは気をつけるという事を教えて訓練を終了する」

良く聞けよ、と彼は言い

「まず、スキルのインストールだが、先程言ったとおり、インストールにはスキルランク×5分の時間がかかり、その間は無防備になる。出来る限りスキルのインストールは、冒険者の宿で部屋を取って行つと良い。そして、この世界から出る時、つまりログアウトする時だが、安全地帯で無ければログアウトすることは出来ない。これも基本的には冒険者の宿の部屋が適任だ。そして、これからお前達が大陸を開拓するに当たって資金が必要になるだろう。動物たちが落とすものを売るだけでは中々資金は貯まらない。そういう時は冒険者の宿でクエストを受けると良い。さて、ここまで言えば何を言いたいかわかるな？」

彼は、最早トレードマークになったニヤリ顔で言った。

「まずは、冒険者の宿で部屋を取れ。全てはそこからだ。以上、訓練を終了する！」

「……………」ありがとうございます！……………」

勢いでお辞儀してしまったが、みんなしてたので恥ずかしくはない。

それに、ここまでしっかりと『訓練』して貰ったんだ。お礼はちやんと言っておきたい。

「良い返事だな、お前ら。さて、そろそろ到着するみたいだぞ」

鬼灯さんは、船の向かう先を親指で指し示した。

そこには広大な大陸が見えていた。何処まで続いているのか分からない陸地、遠くには、てっぺんが雲に隠れて見えない程巨大な山脈がそびえ立ち、そして今船が向かう先には

「港だ。それもかなりでかい！」

この船も5階建てのビル程度の高さがある船のようだが、同じような船が20隻以上泊まっている。

港では、沢山の人が忙しそうに働いているのが遠目にも分かった。気付けば船が揺れている。

「でかいのは港だけじゃないぜ？港のすぐ外には、でっかい町並みが扇状に広がってる。冒険者としてセントレイル大陸に来た奴らが必ず最初に訪れる、始まりにして最大の港街」

鬼灯さんは手を大きく広げ、もう何度目か分からないニヤリ顔で俺たちに向かって言った。

「グランポートシティへようこそ！新たなる冒険者達よ！」

6話

船がゆっくりと港に接岸していく。
最後に大きく揺れた後、船の揺れが小さくなっていった。

「到着、だな。後はその階段を下りればグランポートの西区画港だ。みんな西港って呼んでるな。人混みが凄いからスリには気を付けるよ?」

「気をつけると言っても、盗まれるようなもの何も持ってませんけど」

おっとそうだった、と鬼灯さんは後ろ手で頭をかき、Dデバイスで誰かに連絡をする。

すると、すぐに船員の姿をした人がリュックサックのようなものを5つ抱えて持ってきた。

一人であの量を持つてくるとは、やるなああの船員。

「これからセントレイル大陸を開拓するお前達に選別だ。一人一個ずつ背負い袋を受け取れ。中には水袋、毛布、ナイフ、たいまつ6本に火口箱にロープ10m、そしてこの世界の通貨1000goldだ。まあ飽くまで最低限の道具だから、足りないものは各自で買い足してくれ」

これは、まさしくファンタジーって感じのアイテムだな。すげえ。中身を確認し、よく分からない感動に打ち震えていると、もう一度船員が、今度は何か丸まったものを持ってきた。

「そして、次がこいつだ。これは羊皮紙ってやつだな。更に、こい

つには死亡時紛失無効の効果が付いてる。ほら、受け取れ」

渡されるがままに受け取り、丸まったそれを広げる。

これが羊皮紙か、初めて触るな。当たり前だけど。こんな肌触りなのか。

それにしても、この羊皮紙何にも書かれてないぞ？

「何故こんなものに死亡時紛失無効なんて効果が付いてるんだ？」

「良い質問だ、カケル」

つい口に出してしまった言葉を拾われ、鬼灯さんが話し出す。

「こいつに何で死亡時紛失無効の効果が付いているかだが、そんなだけこれは大事だつて事だな。何故なら、お前達はこいつに、この大陸の地図を描かなきゃいかんからだ」

「地図：ですか？」

「そうだ、お前達はこの大陸を開拓しに来た冒険者だからな。何を持って開拓とするかはお前達に委ねられているが、目に見える成果として地図の作成が存在するんだ。この大陸の何処に何があるかを描き込み、ある程度の量を描いたら宿の店主にでも見せる。相応の報酬が手に入るはずだぜ」

「そんな地図なんて、今まで何度も提出されているのでは？」

「そうとも、この世界に今何万人の冒険者が居るか知らないが、そんな地図なんて、ごまんと提出されているだろう。」

そして、良くある質問なのだろう。鬼灯さんは慣れた口調で説明を続ける。

「勿論、地図は何万枚と提出されている。だが、ここは未開の大陸だからな。情報はあればあるだけ良い。たとえ同じ内容の地図だつ

たととしても、情報が多ければ、地図の情報自体の信憑性が増すから意味があるし、時間がたてば土地に何か変化があつて、違う内容が描かれることもあるかもしれないからな。最も、その場合はその情報が正しいかチェックが入り、違った場合は罰金、という事にもなる。描くからには正確に描いてくれよ?」

そして、言いながら鬼灯さんはDデバイスを操作した。そのすぐ後、俺のDデバイスがデータの受信を知らせる。

Dデバイスを起動し、データを開くと、そこには俺の顔と名前、そして番号が書かれたカードのようなものが映し出された。

「そいつが最後だ。それは冒険者達に配られるカード、身分証のよ
うなものだな。地図を提出する時や、クエストを受ける時などはそ
いつを提示しないと駄目だからな。あとは、フレンドになりたい場
合はそのデータを送り合えばなれるぜ」

なるほど、大事なものだな。

Dデバイス内に保存されているようなので、無くす事もない。ま
た、キャラクターを詐称しても、こいつを出せと言われれば速攻で
ばれるわけだ。

「さて、長くなつちまつたな。これで本当に最後だ。そんじゃお前
ら、この世界を楽しんでこい!そうすりゃまた会う事もあるだろう
ぜ。じゃあな!」

鬼灯さんは大きく手を振ると、船の中へと消えていった。

「あなたは行かないの?」

鬼灯さんが消えていく様子を眺めていると、声をかけられた。

声の方を見ると、フランベルが一人だけ立っており、他の人達は居ない。

「どうやら先に降りたみたいだな。」

「勿論行くさ。君こそ行かないのか？」

「あなたがぼつと突っ立ってるから、どうしたのかと思ったんだよ。それじゃ、私も行くわ。縁があればよろしく。」

そう言っ、軽く手を振りながら颯爽と彼女は船を降りていった。降りた先は人が溢れかえっており、小人の彼女はすぐに見えなくなった。

「っーか、なんだありゃ。」

人の海、そうとしか表現できないほど人が溢れている。たとえならあれだ、大学のサークル勧誘みたいな。

船を下りる階段の半ばまで来て、俺はそのたとえば間違っただけな事悟った。

「こちら星空の宿！新人冒険者には特別に宿代3割引！3割引を行っております！是非宿には星空の宿を！」

「潮風の燕亭、潮風の燕亭です！新人向けのクエスト、山盛り用意してます！どうぞ潮風の燕亭にお越し下さいませ！」

「ギルド、クロスウィンドは初心者募集中！君たちもみんなで仲良く冒険の旅に出よう！加入者には低ランクスキルデータがもらえるキャンペーン中です！」

「初心者皆さん、冒険に不安は御座いませんか！？もしどうしたらいいか分からなくなった時は、グランポート冒険者学校へお越し下さい！懇切丁寧にお教えます！今なら入学費無料ですよ！」

「お！あの小人可愛いぞ！今日はランクが高い子が多いな！全員撮

れ！シャッターチャンスを逃すなよ！」

「『『『『『『おおー！！』』』』」

：最後は何かおかしき気もするが、とにかく大学の新歓時期と大差ないな。

前後を見れば、何処にいたのか新規の冒険者達が列をなしているし、横を見れば別の船からも人が降りてきている。向こうの船の方向の勧誘は英語が聞こえる。あつちが響きからしてドイツ語？どうやら船によって国が違うみたいだな。

よく考えれば乗っていた奴らはみんな日本語しゃべってた。見た目外国人な奴らばつかつたけど。

ぱつと見日本の新規冒険者が一番多い気がするな。やつぱ夏休みが始まったばかりで、新規加入が多いのかもしれない。

やつとの事で船から降りると、案の定人にもみくちやにされる。

こういふのは苦手なんだ…さつさと逃げるに限る。

荷物を盗まれないよう、背負い袋をしっかりと抱え、急ぎ足で人混みを縫っていく。

「ふう、やつと出られたか…」

しばらくして、何とか人混みから脱出する事に成功。

しかし、格好から初心者バレバレの俺がこんな所にいたら、速攻で勧誘の餌食だろう。急いで逃げるとするか。

「さて、道はどこだ…つと？」

辺りを見回すと、人だかりから一步離れたところで女の子が勧誘のようなものをしていた。

なぜようなものかと言えば、

「あのー、えっと、新人のみなさーん、宿泊に静謐なる雲亭はいかがですかー？その、良いところですよー」

片手を上げ、精一杯声を出しているようだが、あまり効果は上がっていないようだ。

「ほんとに良いところですよー。それから、あと、とっても静かですよー。あっ、料理もとても美味しいですよー」

その場で背伸びをしながら何度も声かけしているが、あの呼び文句では成果は上がらないだろう。というかもっとセールスポイントは無いのだろうか。いや、料理が美味しいってのは心惹かれるけど、しばらくして、どうやら諦めたらしく、とぼとぼとこちらに向かい歩いてくる。

どう見ても落ち込んでるなー。

と、ぼうつと見てるうちに彼女が目の前まで来てしまった。

向こうも前に誰かいるのに気付いたらしく、顔をあげてこちらを見る。

「あー！その格好ですけど、もしかして新人さんですかー？」

「ええ、そうですけど…」

「やっぱりそうですよねー！もう冒険者の宿は決まっていますかー？」

今が勧誘のチャンスとみたか、顔がキラキラと輝いてこちらを見てくる。

これまた美人と書いていい人だ。まあそうはいってもここまで会ってきた人達も、今そこらを歩いている人達もみんな美人なのだが、さすがVR世界。

腰まである長いウェーブのある髪の色は金、おっとりとした、たれ目の瞳の色は翡翠に輝き、小さめの口は奥ゆかしさを感じさせる。

服装は白と黒を基調とした、ロングスカートのシックなウエイトレス姿。身長は俺の鼻ぐらいの高さで、しっかり出るところが出たその姿はフランベルとは大違いだ。ぱっと見た感じ獣っぽくもないし、耳も細くないのでおそらく人間種族だろう。

「あのー、やっぱりもう決まっちゃってますかー？」

「あ、いえいえ、まだ決まってるんですけど」

「ならば是非、ウチの宿に来ませんかー？良いところですよー」

さて、どうしたものか。これは所謂捕まってしまった状態だな。しかし、降りてすくなものだからあまり状況がつかめてないんだよな。

勧誘されてるってのは分かるんだが、ギルドとかならともかく、何で冒険者の宿が勧誘をするんだ？

「あの、宿に行く前にですね、何故冒険者の宿が勧誘してくるのか教えて貰って良いですか？」

「あー、そう言えば初心者さんはそう言った事も知りませんものねー。私も去年はよく分からず右往左往したものですよー」

分かる分かる、と彼女は首を大きく振りながら、

「実はですねー、冒険者の宿には2通りありましてー、WCDが直接運営してる宿と私達冒険者が独自で運営してる宿があるんですよー。それで、冒険者が運営してる宿は、家賃とか稼ぐために、必死で勧誘してるんですよー」

「冒険者が宿を運営してるんですか？」

「はいー、このゲームは色んな事ができますからねー。私が今してるのも、私が泊まってる宿のアルバイトですしー、何も戦うだけのゲームじゃ無いんですよー」

なるほど、あそこで宣伝してたのは、冒険者が運営してる宿の人達だったのか。

鬼灯さんに聞いた話じゃ、冒険者の宿でクエスト選んだりスキルインストールするみたいだし、かなり重要みたいだからな。それを商売にできるならかなり儲けられるんだろう。その分同業者も多いってわけだ。

「冒険者の宿は重要ですよ。店によって受けられるクエストに偏りが出ますしー、大概是同じ店の人とパーティ組む事が多いですからねー」

「なるほど、それは大事ですね」

「でしょー。ですから、是非ウチの宿に来ませんかー？」

来て来てーっと言った、輝かんばかりの笑顔でこちらを誘ってくる彼女。

その笑顔は非常に魅力的なのだが、こればかりはそう簡単には決められないだろう。

「普通の人は、ネットで宿を決めてから来るんだろうな……」

「そうですねー、普通はそうかもしれませんー。」

おっと、つい口に出してしまった。

しかし、独り言に普通に返答を返してくるとは、この人やるな。

まあ、ともかくは情報、かな。

「えっと、とりあえずあなたの言う宿の事、教えて貰って良いですか？」

「あ、はいー。私の居る宿は、静謐なる亭亭と言いましたねー、宿主さんは寡黙だけどいい人でー、店も静かで落ち着いた雰囲気です

しー、料理も美味しくとってても良いところですよー」

ここぞとばかりに勢い込んで、身振り手振りでどれだけ良いところか紹介してくれる。

してくれるのだが、しかし。

「あの、静かで落ち着いているのは良いんですが、それって利用してる冒険者の方が少ないって分けじゃ…無いですよね？」

「…いやー、そんな事…あるかもしれませぬー。はい、すみません、そうなんですー…」

一気に落ちこみ、下を向いてしまう彼女。

しまった…どうやら痛いところを突いてしまったようだ。

「でも、ほんとに良いところなんですー。それだけは嘘じゃないんですよー…」

「あ、あの、すみません、失礼な事言ってしまったて」

良いんですよー、と彼女は力なく首を振り、

「ほんとの事ですからねー。それに、最初なら活気のあるところに泊まるべきなんですー。何をするにせよ、人がいるってのは大事ですからねー」

お時間取らせてごめんなさいー、と彼女はお辞儀して、去っていくとする。

その後ろ姿が、あまりにも淋しそうだったからだろうか、いや、そんな格好いい理由じゃない。

そんな姿を見て声をかけてしまいうくらいには、俺も男だったってこと何だろう。

「あの！」

「何ですか！。評判の良い宿は、私知りませんよー？」

「いや、そうじゃなくてですね……」

くそ、恥ずかしいな。

俺は後ろ手で頭をかきながら、精一杯さりげない風を装いつつ彼女に告げた。

「案内してくれませんか？その……静謐なる雲亭に」

7話

「ありがとうございますー、と喜んだ彼女に導かれ、俺は石畳できた大通りを歩いていた。」

「あー、そう言えばまだ自己紹介してませんでしたねー。私はモモと言いますー。TPWは、初めて丁度1年くらいになりますかねー」

「あ、どうもです。俺はカケルと言います」

「カケルさんですねー、よろしくお願いしますー」

彼女は、ニコニコと笑いながらこちらを先導する。

「これは、やつぱり止めますとか絶対に言えない雰囲気だな」

「カケルさん、何か言いましたか-?」

「っ、いや、随分と大きな道だなーなんて、あはは」

「ああ！初めて来られる方はみんなそう言いますねー。この道はグランポート西中央路と言いましてー、街の中央を流れるセレヴィヌス川をはさんで、東西にそれぞれ一本ずつ、中央出口まで繋がってるんですよー」

ふう、何とかごまかせたみたいだ。おっとりしてるようで鋭くないか、この人。

しかし、中央出口まで繋がってると思うけど、もしかして遠くにくっすらと見える門の事か？

一体どれだけ広いんだこの町。

「そしてー、港から中央出口までの間に、住宅地区、商業地区、宿泊地区の順に区画分けされてましてー、それが東西それぞれに存在

するんですよー。もし欲しいものがあれば商業地区に行ってみて下さいー。色んな店があつて楽しいですよー」

「へえ、そういう風に分けられていると、探すのも楽そうですね」
「そうは言っても広いですからねー、目当ての店を見つけるのも大変ですよー。その代わり、お気に入りのお店を探す楽しみもありますけどねー。あ、その横道が住宅地区中央路、通称住宅通りですねー。こんな感じで各地区の大通りの部分で川の上に橋が架けられてますんで、そこで川を越えられるようになってるんですよー」

確かに、今歩いてる道には劣るが、それでも大きな石畳の道が左右に伸び、右手には石橋が反対の岸迄伸びている。

それにしても人が多いな。通行人は勿論なのだがそれよりも、

「露天、ですかね。ござ敷いて荷物広げてる人がいっぱいいますけど」

「その通りですよー。これぞグランポート名物大通りの露店街なんですよー。だから、中央路は通称露天通りと言われているんですよー」

彼女の言うとおり、大通りの川側に陣取り、隙間無く埋められている露天は、露店街と言われても違和感はない。値段交渉や声かけなどが飛び交い、空きスペースができれば即座に別の人間がそこを陣取る。

何処を見ても、凄まじい活気だった。

お登りさんのように辺りを見回していると、また大きな横道が現れる。左を見ればさっきまでと雰囲気が変わったため、商業地区に変わったんだらう。しかし、そんな事よりも気になるものがあった。

「あの、モモさん。あれ、何ですかね。教会、みたいに見えるんですけど」

俺は彼女を呼び止め、右手側の川の中央に存在する、建築物を指さした。

ぱつと見には、たまに見るキリスト教の教会そのものだ。

「あれはですねー、神殿というものですよー。この大陸の各街に数個ずつありましてー、あそこでホームポイントの設定や、怪我の治療を行えるんですー。そんな事もあって、野良パーティ募集や待ち合わせによく利用されるんですよー。特にあれは、この街最大のグランポート中央大神殿ですからねー、神殿橋はいつも人が多くて大変なんですー」

神殿は、川に架かる橋の中央に入口があるようだ。だから神殿橋と言っただろう。

彼女の言うとおり、橋の上には人が多い。

しかし、野良パーティ、か。パーティってのは分かる。俺だってRPGぐらいはやった事あるし。

ただ、何でそれに野良が付くんだ？

「ホームポイントってのは、死んだら戻ってくる場所で良いんですよ。それじゃ野良パーティって何ですか？」

「えっとー、私も詳しい訳じゃないんですけどー、その日限りで組むパーティのこの筈ですよー。あ、宿は東区画にあるんですけどー、ここは人が多いからもう一個先の橋で渡りますねー」

そのこのジュース屋のリンゴジュースは絶品ですから、機会があれば飲んでみて下さいねー、とか、あそこはぼったくり喫茶ですから行かない方が良いと思いますよー、とか為になるようなならないような話を聞きながら、足を進める。

「そういえば、店がいっぱいありますけど、あれは全部冒険者の方

「がやっってるんですか？」

「全部は流石にないですよー。詳しい数は知らないですけど、7割ぐらいじゃないですかねー」

「7割、ですか。冒険者がやっってるのと運営がやっってるのって何か違いがあるんですか？」

「そうですねー、運営がやっってる店は基本的に店員がNPCなのでー、割引だったりセールだったりをする事がないですかねー。それにまっとうな店が多いですー。冒険者がやっってる店なら色々融通が利きますしー、よく分からない店も多いですかねー」

アルコール度数80%以上の酒しか置いてない酒屋「Burni ng Flame」とかー、出てくる料理がみんな赤い喫茶「タカノツメ」とか色物が多いですー、とかなんとか。

確かに色物が多いなしかし。

「そんなんで、経営とか何とかなるんですか？」

「何とかなるみたいですねー。お客は世界中にいますしー、このゲーム、アイテムの類はNPCも買っていくんで、プレイヤーに人気が無くて大もつけしてる人とか居るみたいですよー」

「NPCが買物、ですか？」

「はいー。そう言うプログラムが仕込まれてるらしいですー。NPCに冒険者は居ないので、冒険者の宿に来る事はないんですけどねー」

そう言うプログラムも仕込んで欲しいですよー、と彼女は嘆く。しかし、そうなるとNPCはもしかしてそこら中にいるのか？

そうか、大通りになってから美男美女祭じゃ無くなったのはそれでも多い事には変わりはないが俺と同じような奴が増えたんじゃない、NPCが居ただけだったんだな。

「たしかに、こんな奴いねーだろ！みたいなのも居たからな…」
「あー、NPCの人達は個性的な人も多いですからねー」

ナチュラルに独り言に返すのは止めていただきたい。
いや、俺が独り言言つのが悪いんだけどさ。

「あ、そろそろ宿泊地区ですねー、もう少ししたら川を渡りますよー」
「了解です」

気付けば、確かにまた町並みが変わっている。それに、さっきより人通りが少なくなっただが、美男美女率が跳ね上がったぞ。

少し町の方を見れば、色々な形をした建物が雑多に並んでいる。石造り、煉瓦造り、藁に板張りとは何でもありか。店の前では客引きなのか、人が立って呼び込みをしている。

「そういえば、冒険者の宿の説明をしませんでしたねー。冒険者の宿が安全地帯である事や、クエスト受注の場である事は聞きましたかー？」

「はい、教えて貰いました」
「そうですかー。では、利用方法について教えておきますねー。まず、冒険者の宿は名前の通り宿ですから、宿泊する事ができますー。とはいっても、ネトゲ内で眠る事も無いと思うので、このゲームの宿は一泊のお値段ではなく、12時間部屋を借りるお値段となりますー」

勿論食事付きですよー、と楽しそうに言う彼女。

VR世界内では、飲食をしても当然現実世界での身体に栄養は行き渡らない。しかし、満腹中枢は刺激されるし、脳内信号を用いて酔う事も可能だ。たばこなどにもそれは適用されるので、VR世界

でのみ酒やたばこをたしなむ人間も多いと聞く。ちなみにいくら飲んでも肝臓は鍛えられない、当然ながら。

「公式が運営してるグランポートホテルでは、12時間で20goidとなってます。この12時間というのは、この世界の時間ではなく、プレイヤーがログインしてる時間になってます。時間超過したら延滞料金取られちゃいますから、注意して下さいね」
「なるほど、ログイン時間ですか。そういうのはオーナーに分かるようになってるんですか？」

「えっと、確かですけど、部屋を借りる時にはオーナーに冒険者カードを見せる事になってるんです。その時にオーナーが、冒険者番号を控えているんで、それを運営に送るか何かする事で、その人のログイン時間を教えてもらえるらしいですよ」

なんとも曖昧な。しかし、これって大丈夫なのか？

「はあ、しかし、そういうのって所謂プライバシーの侵害になっちゃいませんか？いや、微妙なところなのかもしれませんが」

「どうなんでしょう。でも、一応公式から、宿のオーナーにはログイン時間しか分からないようになってるって書いてありましたし、誰にでもできないように、そのページには、冒険者の宿のオーナーしかいけないようになってるらしいですから、大丈夫なんじゃないでしょうか？」

「そうなんですか。結構詳しいんですね」

「はいはい、と彼女は手を左右に振って、

「これ、全部公式サイトに書いてある事ですから、皆さん知ってる事ですよ」

「そ、そうなんですか…」

い、いかん、これじゃ俺が普通の事も知らない男みたいじゃないか。

いや、俺はまだ初心者なんだ。今日のところはこれで押し通るとしよう。

…うん、ちゃんと公式サイトは読まない駄目だな。

「もし、そういうのが気になるんだったらー、公式運営の、グランポートホテルに行かれても構いませんよー。実際運営も推奨してますしー、人も1番多いですしねー」

「あ、いやいや、ちょっと気になっただけなんで、気にしないで下さい」

そうですかー？と彼女は首をかしげながらも、足を進め、やっとたどり着いた石橋を渡っていく。

「しかし大きい川ですねー。セレヴィヌス川でしたっけ？こんな大きな川の上を歩いたのは、初めてかもしれません」

「でしょー！私も初めて橋を渡った時は、感動しちゃいましたよー。この川の上流にはセレファレス湖って大きな湖がありましてー、そこから流れてきてるんですよー」

「へえ、こんな大きな川の源泉なら、やっぱり大きいんでしょうねー」

なんせ川幅が広い。距離はよく分からないが、どうやって石橋を架けたんだ、と思うくらいには広い。瀬戸内海よりは小さいと思う。そんな広さの川が、風を受けて波を立てている。

「何回か行った事ありますが、大きいですよー。少なくとも琵琶湖よりは大きいですよー」

「なるほど、それは大きいですね！」

なんとというか、価値観が同じみたいで親近感が湧くな。

このご時世、VR製品の中には、VR世界に行って海外の湖を見たり、海外の川を渡る事もできるはずなのだ。そこにある湖や川は確かに偽物だ。だが、少なくとも今目の前にある川と同じぐらいには、リアリティがある。だから、大学の知り合いの中には、そういったもので比較してくる奴も少なくはない。

そういった知り合いに比べると、モモは好感が持てるなど、そう思った。

「まあ、失礼な話だけだな。どちらに対しても」

別に、VR世界で体験した事と現実を比較する事は、悪い事でもなんでもない。むしろ、この時代では普通の事だ。ただ、俺の好みの問題なのだから。

モモは、今回の独り言は聞こえなかったらしく、楽しそうに川とそこを走る船を眺めている。これだけの広さの川だ、渡し船などもあるのだろう。

「しかし、この橋渡るのは気持ちいいんですけどー、長いだけが難点ですー」

こちらを振り向き、苦笑いしながら彼女が告げる。

「確かに、これは長いですね」

かれこれ10分程歩いているが、やっと対岸に到着したところである。

これは移動が大変だな。買い物に行くのも一苦勞しそうだ。

「ここからはすぐですから、安心して下さいねー」

こっちの疲れた様子を見て、安心させるように告げ、

「ただ、ちょっと入り組んでるんでー、はぐれないように気をつけて下さいー」

そういうと、橋を渡ってすぐの小道に入る。

なんとというか、言われないと気付かない程分かりにくい小道だ。

木の陰に隠れている事もあり、何も考えず歩いていると、絶対に見過ごしてしまうだろう。

はぐれないように、モモの後ろに遅れず着いていく。

その後もいくつかの曲がり角を通り、彼女が着きました、と言った頃にはどういうルートを通ってここまで来たのか忘れてしまっていた。

「到着ですー。ここが静謐なる雫亭ですよー」

「ここですか… なんとというか、まさしく冒険者の宿って感じですね」

ボキヤブラリーが無いなど自分でも思うが、その建物はいかにも物語に出てきそうな、木製の宿だった。

あんなにも入り組んだ路地の奥にあるはずなのに、日当たりが良さそうで太陽の光をしっかりと浴びている。二階建てのようだが、奥にも結構な広さがあるようで、思っていたのよりもずっと大きい。両開きの扉の横には、金属でできた、雫が水面に落ちる様を形取った看板があり、静謐なる雫亭と書かれている。

「それじゃー早速、行ってみましょうかー!!」

彼女は機嫌良く宿へと入り、入口でこちらに向かって手招きをする。

ここまで来て行かないわけにもいかないし、意味もない。
俺は歩を進め、宿の中へと入っていった。

8話

宿の中は明るかった。

どうやら、左手の窓から太陽の光が入ってきているようだ。

窓の手前にはテーブルと椅子がいくつも並んでおり、食堂なんだろうという事が見て取れる。

「カケルさん、こっち来てくださーい」

「あ、はい、今行きます」

モモがに呼ばれ、正面のカウンターまで進む。

カウンターは随分と横に長く、カウンター左奥の棚には色んな種類のお酒が置いてある。

「それじゃ、ちょっとオーナーを呼んできますのでー、ここで少しだけ待ってて下さいー」

そういうと、彼女は奥へと向かっていった。

彼女がオーナーを連れて戻ってくるまでの間、宿の中を眺めて待つ事にする。

左にはさつきも見たように、テーブルと椅子がいくつつか。見る限り清潔に保たれており、何処か上品さを感じさせる。右には、大学にあるような掲示板が並んでおり、板には紙がいくつつか貼られていた。

あの紙はなんだろうか。掲示板に近づくと、紙には字が書かれていた。英語で。

うーん、俺、英語は苦手なんだよな。だがまあ、少しくらいなら読める。一番上に書かれてるでかい文字はクエスト、だろう。つま

りこれはクエストの依頼書って事かな。

「でもなんで英語なんだろう。宿の名前は日本語だったのに」

まあ、このゲームの運営であるWCDは多国籍企業だし、外国人も大勢いるゲームだから英語が使われてても全然おかしくないんだが。でも、それなら宿の名前だって英語にした方が良いんじゃないだろうか。

暇つぶしに、依頼書を斜め読みしながら待つ。

しかし静かだ。モモが静かなところだとは言っていたが、ここまで静かだとは思わなかった。

まだ日も高いし、人がいてもよさそうなものだが。

「ってちよつと待て。日が高いだって？」

おかしい、俺は今日起きたのが昼、そこから時間をかけてユーザ登録し、VRダイブした頃にはもう夕方だったはずだ。更に時間をかけたキャラメイクと、鬼灯さんの訓練、船を降りてからここまでするのにかかった時間。どう考えても夜中になっているはず。筈なのだが。

「さつき、絶対昼だったよなあ。どうなってんだ？」

太陽の位置を確認するべく、窓の外を見ようと振り向くと、そこには人が居た。

男だ。身長は俺が少し見上げる程であり、短く刈り込んだ白髪交じりの金髪、と灰色の瞳は男によく似合っており、西洋風な顔も相まって日本のおばさん達に人気になりそうだ。最も、無愛想な顔つきが全てを台無しにしているが。服装は白い半袖のシャツに茶色いズボンと素朴である。

っていつか、そんな事よりも、

「えっと、どちら様でしょうか？」

「…」

質問には答えず、こちらをじっと見てくる男。誰だ。

そもそも、いつの間に背後に来たんだろう。全然気付かなかった。

「…」

なんで何も言わないんだろう。こちらも戸惑いながら見返すと、その耳が長い事に気付く。

どうやら、この人は妖精人らしい。確か山桜さんが、妖精人は線が細くなる、みたいな事を言っていたが、この人はそんな様子は無い。よっぽど元の線が濃かったんだな。

「あの、俺はここに部屋を借りに来ただけでして、怪しいものじゃないです！」

「…」

俺の言葉を聞いても、男は何も言わず、カウンターの方へと歩いていった。

一体何なんだ。この客だろうか。

男はカウンターにたどり着くと、そのまま裏側へと周り、こちらを向いて俺の方を見た。

「…」
「…」

なんだろう。俺の方をずっと見ている。

俺も、蛇に睨まれた蛙のように動く事ができない。頼む、誰か何とかしてくれ。

「カケルさん、ごめんなさい。オーナー、どこかに出かけてるみたいでー」

凍った空気をぶちこわすように、モモが奥から戻ってきた。

ありがとうモモさん、あなたは女神だ。

「どうしたんですかー、そんなところで固まってー」

「いや、何と言えがいいか…その、とりあえず、なんで今昼なんですか？」

「あー、そういうえば、日本は今頃夜ですものねー。まあ、理由は単純でしてー、この世界の時間は、世界標準時間に合わせられてるんですー。イギリスのグリニッジ天文台ですねー。だから、日本とは9時間ぐらいの時差があるんですよー」

「なるほど…そうだったんですか」

さすが、世界中で流行ってるだけあるな。時間も世界基準とは。ってそうじゃないだろ俺！

「あの！時間についてはよく分かりました。それで、ですね。あの方はどちらさんなのでしょうか？」

そういって、手を男の方へ向けると、彼女はそちらを見て驚いた様子で、

「ライオットさん！何処行ってたんですかー！探したんですよー！」
「…」

モモが話しかけても無言を貫く男。どうやら誰に対してもあらしい。

良かった、俺に対するいじめではなかったか。

しかし、探してたということは、もしかして、

「モモさん、ひょっとしてその人が…?」

「はいー、この人がこの宿のオーナー、ライオットさんですよー」

ライオットはこちらを見やり、本当にかすかだが、会釈したように見えた。

「ライオットさん、こちらカケルさんですよー。このたびウチの宿に泊まってもらえる事になりましたー」

「え、あの、まだ泊まると決めただけでは…」

「ライオットさん、そんな目で見ないで下さいー。これから！これからウチの説明して決めてもらうんですよー！」

こほん、と彼女はかわいらしい咳をし、

「この静謐なる雫亭はー、見ての通り静かで秀囲気のある宿ですー、オーナーも見ての通り寡黙でプライバシーの保護も万全、おまけに料理も美味しいですしー、更になんと、料金がとっても良心的なんですよー！」

「前半はともかく、後半は興味がありますね。どの程度良心的なんですか？」

「前半も大事だと思うんですけど…まあ置いときますよー。料金は、さつきも説明しましたが、公式のホテルでの12時間20gを基準としましてー、24時間30g、72時間80gとお得になって

おりますー。勿論全て、12時間ごとにお食事のサービス付きですー。更に600時間で600gの長期滞在お得コースもありますよー」

これは、中々安いんじゃないだろうか。72時間契約なら、港にいた3割引の宿屋以上に安い事になる。

さすがに600時間はないが、600時間も通常の4割引と破格なんじゃないだろうか。だが、色々とネックもある。

「お値段の方は良く分かりました。しかし、想像していた以上に冒険者の方がないのですが、この店でパーティを組む事はできるんですか？」

「あー、それはー…一応この宿には、まだ泊まってる方が何人かいらっしゃるんですけどー、どの方も結構な実力者でして、私は戦闘はしませんし、パーティを組むのは難しいかもしれませんー」

「そうですか…あ、それと、俺実はあんまり英語とか得意じゃないんですけど、クエスト依頼書が英語しかないみたいなんですけど」

「それはウチの宿の方針でしてー、出来る限り誰にでも読めるようにするという事で、原文のまま貼ってるんですー。そんなに難しい内容じゃないから、大丈夫ですしー、読めなかったら私に言ってもええれば翻訳させて貰いますよー」

「分かりました…それじゃあ、少し考えさせて下さい」

とりあえず、依頼書の方はプライドを捨てればどうにかなりそうだ。問題はパーティと立地条件だろうか。しかし、立地条件に関しては、何処に何があるかまだ分からないし、しょうがないところだろう。問題はパーティの方だ。ここでは、俺と同じぐらいの実力を持つ冒険者とは知り合いになれないだろう。最初からパーティを組

む必要はないだろうが、折角やるのだし、いずれは組んでみたい。

「うーん」

視界の端で、モモが不安そうな顔つきでこちらを見ている。

いや、殆ど決まってるんだが、もう一押しが欲しい。

その時、何かを叩くような音がした。

「」

「…ライオットさん、なんですかー？」

ライオットがカウンターテーブルを叩いた音だったらしい。

彼はモモに眼を合わせると、右手の人差し指で天井を指し示した。

「…あー！分かりましたー！カケルさん、部屋ですー。部屋を見て決めてはいかがですかー？」

「部屋、ですか。構いませんけど」

「はい、では早速行きましょうー！」

言うのが早いか、彼女は掲示板スペースの近くにある階段を上っていった。

ライオットの方を少し見てみるが、彼は特に反応せず、いつの間にか手に持っていたグラスを布巾で磨いている。

「カケルさん、まだですかー？」

「あ、今行きますー！」

あわててモモの後を追いつき、階段を上る。

二階に出るとそこは廊下で、左右を見れば、手前側の左に1つ、右には2つの扉。向こう側には4つの扉が並んでいる。モモは廊下

に出て目の前にあった扉、向こう側の左から2つ目の扉の前にいた。

「ここは202号室ですー。左隣の部屋が201号室で、私の部屋ですねー。では開けますよー」

彼女は、スカートのポケットから鍵束を取り出し、目当てのものを見つけると、鍵穴にさして、鍵を開ける。

それではどうぞー、と彼女が扉を引いて開け、中をこちらに見せる。

部屋の中は普通だった。備え付きの洋服ダンスと、テーブルに椅子、そしてベッドがあるだけの、むしろ普通よりもものが少ないような部屋だった。だが、

「これは…凄い！」

奥には大きな窓があった。そしてその向こうには、異国の情景がありありと映し出されていた。

たまたま正面に高い建物が存在しないのか、宿泊地区の土地が高いのか、そこからはグランポートシティの町並みが一望出来るのだった。

手前から斜めに視界を横切るセレヴィヌス川、その川の両隣にある大通りの活気ある風景、その周りに広がっていく多種多様な建築物。所々には荘厳な神殿が見え、1番奥には巨大な港と船、そして何処までも続く海が青い色彩を輝かせていた。

「凄いでしょう？グランポートの町並みをここまで一望できる所はそうそう無いと思いますよー。私もこの景色を見てここにしようと思ったからー」

モモに返事を返そうと思ったが、なんだか言葉にならなかったの

で止める。

それにしても、どうやら、最後の後押しももらえたようだ。
いや、後押しなんてものじゃないな、これは。

「あのー、真面目な話、別にここに決めたからといって他の所に行つちやいけないわけでもないですしー、試しに済んでみたら気に入るかもしれないよー…なんて。駄目ですかー？」

返事を返さない俺の様子をうかがうように、モモがおずおずとこちらを見てくる。

いかんいかん、早く彼女を安心させてあげるべきだろう。

「いえ、決めました。ここに泊まります。むしろ泊まらせて下さい！」

勢い込んだ俺の言葉に一瞬目を白黒させたものの、すぐに俺の言葉の意味を理解して笑顔になって、

「カケルさん、ありがとうございますー！それでは、早速チエックインしちゃいましょうー！」

そういつて彼女は俺の手を取り、俺をライオットの前まで連れて行った。

ライオットはこちらをちらつと見て、磨いていたグラスを置き、モモへと目を向けた。

「ライオットさん、カケルさんがウチに泊まってくれるそうですよ

ー！」

「…」

ライオットは無言で俺の方を見ると、親指で背後を指さした。そこには英語で色々と書いてあるが、数字などを見る限り料金表だろう。

しかし、これも英語か。

「あー、時間ですねー。カケルさん、何時間にしますかー？」

「えっと、とりあえず72時間をお願いします」

「…」

時間を告げると、ライオットは右腕を前に構え、左手で右手首に着いているDデバイスを指し示した。

灰色の流線型でちょっと服に合っていない気がする。

しかし、これはどういう意味だ？

「カケルさん、冒険者カードを見せて下さいってことですよー」

「ああ、なるほど」

そういえば見せる事になってるんだっとな。

Dデバイスを起動し、冒険者カードの画面を共有設定にしてライオットに見せる。

彼はそれを一瞥すると、すらすらと手元の紙に番号を控え、モモを見た。

「了解ですー。はい、カケルさん、これがお部屋の鍵になりますねー」

モモは先程の鍵の束から、201のものであろう鍵を取り外し、こちらに渡す。

「鍵はこれとマスターキーだけとなっておりますのでー、無くさないよ

うにして下さいねー。鍵をオーナーに帰さない限り、部屋は借りたままとなるのでー、延滞には気をつけて下さいー」

「分かりました、気をつけます」

「一応、時間が差し迫ったら、運営の方からメールが来るようになってますから、大丈夫だと思いますけどねー。あと、部屋にはオーナーがマスターキーで入る以外は誰も入れませんし、オーナーも勝手に入ると規約違反で罰せられるので部屋には誰も入りませんー。ですので、部屋掃除は自分でして貰うようお願いしますねー。勿論、頼んで貰えればルームサービスでお掃除いたしますからー」

「はい、了解です」

なるほど、部屋掃除は自分でか。部屋に勝手に入られる事は無いようにで安心した。

「あとは、絶対無いと思いますけどー、延滞料金を踏み倒す事はしないで下さいねー。運営からペナルティが入っちゃいますからー」。

また、部屋でログアウトしてから2週間ログインが無い場合は、公式運営のグランポートホテルに移動して貰う事になるのでー、そうなりそうな場合は事前に連絡して下さいー」

「分かりました。他には何かありますか？」

「あー、お食事ですけど、12時間ごとに食券を渡してますのでー、それをオーナーに出して貰えば大丈夫ですー。食事はゲーム内の6時から8時、12時から15時、19時から22時のいずれかでお願ひしますねー」

そういつて、モモが食券を渡してくる。

とりあえず無くさないように背負い袋の中にしまい込む。

もう無いですかねー、と彼女がライオットへと問いかけると、彼は無言で首を横に振った。

「ではー、もし他に聞きたい事ができたら、いつでも訪ねて下さいー。私はウエイトレスをやってるか、部屋に籠もってるかしてると思うのでー。もし居なかつたらすみませんけどー」

「いえいえ、ありがたいです。どうかよろしくお願いします」

「はいー、それでは…」

彼女は深呼吸をし、素晴らしい笑顔と共にこちらを見て言った。

「ようこそ！ 静謐なる喫茶へ！」

そして、その横に立つライオットが、渋い男の笑みを浮かべ、静かに言った。

「Welcome」

その言葉は、とても流暢な英語だった。

「え、もしかして…外国の人？」

「え、まさかカケルさん、気付いて無かつたんですか…？ライオットさん、どう見ても日本人じゃないじゃないですかー」

「いや、確かにそうですけど…あれ？」

「…」

「とりあえず、お部屋へどうぞー。日本だともう結構遅いですよー」

なにやら最後で気になる事があったが、モモの言うとおり時間も遅くなってきたので、今日のところは部屋でログアウトすることにしました。

部屋に入り、扉の鍵を閉めて、窓の外の景色に見入る。

「明日から、面白い一日になりそうだ」

Dデバイスを起動して、ログアウトする。

きつと面白い日々が始まる。

あの景色は、俺にそう予感させた。

湧き上がる思いを胸に、俺は意識を手放した。

9話

大地を蹴り、疾走してくるものがある。

そいつは4つある脚の後ろ2つを使い、地面を思いきり蹴飛ばし、こちらへとその身をぶつけてくる。

咄嗟に俺は左腕を前に突き出し、腕に装着された木製の盾を相手にぶつけた。

更に、その勢いに押されないように身体を反らし、相手を流す。流された相手は、盾にぶつかった衝撃で怯みながらも、地面にしっかりと着地し、こちらを見てうなる。

こちらも素早く身を翻し、相手への牽制に右手の木刀の先を相手に向ける。

「さあ、いつでも来い！」

こちらから声をかけたものの、相手は唸ったままこちらの様子を伺っている。

その姿は犬だ。

体長は1m程で濃い灰色の毛色をした犬。

ここ、カーネイア草原に生息する野犬、カーネイア・ハウンドだ。

「来ないならこっちから行くぜ！」

木刀の柄を両手でしっかりと握り、左足をバネにして木刀を振りかぶりながら、相手まで一気に飛びかかる。

「せい！」

掛け声と共に、木刀を相手の胴目掛けて振り下ろす。

だが、刀身が野犬の身体に当たる前に、相手は素早く前に出て躲し、そのままこちらの背後へと回る。

俺は飛び込んだ勢いを殺さず、そのまま直進し、野犬と距離を取って振り返る。

だが、振り返った時には野犬がすぐ目の前まで迫っており、そのまま激突された。

「ぐっ…ごほっ」

そのまま押し倒されぬよう、痛みを耐え踏ん張る。

しっかりと革製の防具が衝撃を吸収し、大したダメージは無い。しかし、相手は野犬。牙で噛まれるとやっかいだ。

追撃を受けないよう、蹴りで牽制し、距離を取る。

「はぁ…はぁ…」

くそ、きつい。相手が素早いのもあるが、何より背が低いのがやっかいだ。振り下ろしたと、相手に当たる前に避けられる。ならば、木刀を上段に構え、すり足で距離をゆっくりと縮めていく。

すると、野犬はしびれを切らしたのか、こちらへと飛びかかってきた。

「もらった！」

叫びと同時に、飛びかかる相手の顔に狙いをつけ、木刀を振り下ろす。

当たった。

刀身に確かな手応えを感じ、そのまま振り抜く。

野犬は地面に叩きつけられ、そのまま動かなかった。

少しして野犬は光に包まれ、光が収まるとそこには物が落ちていた。

「お、1発とは、当たり所が良かったかな」

今までは、3、4発当てなければ倒せなかったのだ。所謂クリティカルというものかも知れない。

乱れていた呼吸を正しつつ、落ちている物を拾う。

落ちていたのは、さっき倒した野犬と同じ色をした毛皮だ。

これで倒した野犬は7体、拾った毛皮が3つ。大体5割の確立で落とす事になる。

「ふう…しんどいな」

さっきの野犬、カーネリア・ハウンドはカーネリア平原に出現するモンスターの中で、1番数が多いらしいのだ。実際、戦っているのはカーネリア・ハウンドばかりであり、こいつがここで1番の雑魚で間違いは無いだろう。そんな雑魚相手に俺は苦戦の連続だった。先程は1撃で仕留められたから良いものの、それまでは仕留めるのに倍以上の時間がかかっており、その分攻撃を受けた回数も多い。装備を整えるに当たって防具を優先したため、あまりダメージがないのが救いだが。

「けど、これはミスったかもな」

防具を優先した結果、武器に回す金が残っておらず、武器がしょぼい。

そのせいで、1番の雑魚であるカーネリア・ハウンドを倒す事にすら苦労する羽目になっている。

やはりもっと良い武器にするべきだったか。

「でも刃物はな…ちょっと抵抗があるよな」

いや、木刀だって十分凶器になりえてるけども。

まあ、買ってしまったものは仕方ない。スキル的には良い買い物には変わりなかったし。

何はともあれ、革袋の中身が一気に心許なくなったのには変わりが無い。そいつを補填するためにも、頑張ってモンスターを狩らなくてはな。

「つと、いたいた…」

周囲を見渡すと、先程と同程度の大きさのカーネリア・ハウンドが見えた。

さつきまでしゃがんでいたせいか、草むらに隠れていたらしく向こうはこちらに気付いていないようだ。

野犬は何かを食べるのに夢中で、今ならこっそり行けば気付かれないかもしれない。

俺は木刀を八相に構え、奴の後ろに回り込みゆつくりと近づいた。まだだ…まだ気付くなよ…もうちょい…よし！

野犬が耳を動かし、素早く頭を上げたがもう遅い。

「はっ！」

「Take this！」

掛け声と同時に木刀を野犬に叩きつける。

その時、奥の背の高い草むらから人が飛び出してきて、右の拳を野犬の顎にぶち当て、そのまま身体を伸ばすようにして上に振り抜いた。

身体の前と後ろでそれぞれ攻撃を喰らった野犬は、そのままピク

りとも動かなくなつた。
そして光を放ち、毛皮だけが残る。

「えーっと…これは？」

「What？」

俺と飛び出してきた人物は、毛皮を間に向かい合う事になった。
背の高い男だ。ライオットより少し高いぐらいだろうか。
まず目を引くのが、ぼさぼさした見るからに手入れされていない
髪から生えているのがった耳だ。

人間ではありえないその姿は、間違いなく獣人種族だろう。たぶん
犬ではないだろうか。

その顔は整っていると思う。何故思うのかといえば、その顔が
酷く険しい表情をしているからだ。

琥珀色の瞳の目を細くし、こちらを観察している。

「Hey you! What kind of intenti
on!? Don't take my target!」

いきなり英語でまくし立てられる。

くそ、やっぱり海外の人かよ！

どうする？どうしよう…とりあえず何かしゃべらないと。

「あー、えつと…I can't speak english!
ワタシエイゴシャベレマセーン!」

あれ？何か違う気がするんだが。

「Really? Unbelievable! 今時english
h話せないとかこのhillyだよ!」

「sorry! sorry! ってあれ? 日本語?」
「合わせてやったんだ、感謝しろよJapanese!」

男は外見に似合わず、流暢とは言えないが、普通に聞き取れる英語をしゃべり出した。

しかし、腕を組み完全にこちらを見下している。

くそつ、いくら俺が英語はなせないからってその態度はないんじゃないか?

とはいえ、合わせてもらってるのはこちら。文句を言う筋合いはない。

「ありがとうございます。それで、なんのご用でしょうか?」

「だから! 俺のtargetを取るとは何考えてやがるって言ったんだよ!」

「ターゲット...このカーネリア・ハウンドの事ですか? 別に取るうとしたわけじゃ...」

「だが、実際このhoundを殴ってるじゃねーか!」

「いや、それはたまたまですよ...」

なんだこいつ、たまたま同時にモンスターを殴っただけでなんでここまで言われなきゃならないんだ?

そりゃ、確立は高くはないかもしれないけど、そういう事だってあるだろ。

「It just happen? NO! 違うね。何故ならお

前が殴ったhoundは俺が仕掛けた餌を食ってたんだからな」

「餌だつて?」

確かに何か食べてるのは見たけど、まさかこいつが仕掛けていたとは。

「そつだ、ratの肉さ。そいつを仕掛けて俺が草むらであいつが油断するのをじつと待っていたっていうのに、youはそいつを横から掠めようとしたわけだ。餌の事、知らないとは言わせねーぜ？」
「いやー、その…知らなかったんです、ごめんなさい」

俺は正直に謝った。しかし、その言葉を聞いて男は更に目を細め、

「嘘つくんじゃねーよ、sonofabitch! houndに餌やつてhuntする方法はネット見りやどこにでも書いてあるだろつがよ！初心者だつてしつてらあ！」

「いや、本当に知らなかったんです。攻略サイトとかそついうのは見てないもので」

「嘘ならもうちょいましな嘘つくんだな、booger！」

全く信じて貰えず、罵倒の嵐を受ける。

確かにこつちが悪いのかもしれないが、ここまで言われる筋合いはないんじゃないか？

この野郎、人が下手に出てたら好き放題言いやがつて！

「すみません！すみません！」

しかし、文句を言っても長引くだけだろう。

ここは謝つてさつさと終わらせるしかない。俺が悪いのは確かだしな。

とにかく謝り続けた結果、どうにか相手も本当に俺が知らないと分かってくれた。

「ま、知らなかったならしょうがねーが、これに懲りて少しはネットでstudyしとくんだな。それじゃ俺はそろそろ行くぜ」

「はあ、申し訳ありませんでした」

くそ、偉そうに！

とはいえ、何が言えるわけでもなく、俺は男が毛皮を拾うのを見ているしかなかった。

だが、男が毛皮を拾おうとしたところで気付く。
毛皮がない。

「Huh? おいお前、毛皮どこにやりやがった!」

「いやいや！俺は何もしてないですよ!」

2人して辺りを見回すと、小動物が毛皮を啜えて走り去っていくのを見つけた。

多分寝床の改善にでも使うのだろう。今からでは追いかけても間に合いそうにない。

「fuck! fuck off!!」

男もそれを見つけたらしく、地団駄を踏む。

「ざまあ」

「何か言ったか!？」

「いえ何も」

男はこちらを一回睨みつけたあと、辺りの石などを蹴り飛ばしながら去っていった。

ちよっとだけスツとした。グツジョブ、小動物!

「…酷い目にあつたな」

若干自業自得とはいえ、ついてない。

気分も萎えたし、1度宿に戻る事にしよう。

背負い袋を担ぎ直し、グランポートシティの方角へと歩を進める。歩きながら、さつきあつた男を思い出す。

いけ好かない奴だった。だが、奴のおかげでカーネリア・ハウンドの倒し方は分かった。

そついう意味では感謝しても良い筈だったが、

「あれに感謝だけはしたくないな」

とにかく気に入くわない。あれだけ罵声を浴びて気に入ったりしたらそつちの方が嫌だが、どうにも反りが合わない気がする。

もう2度と会わない事を祈ろう。

何せこのゲームは数千万人の規模と言われているんだ。同じ人物と偶然会う事なんてそうないだろう。

頷き、もうさつきの男のことは忘れるようにつとめ、街へと足を急がせた。

今回の狩りでどの程度の儲けになるのか。

そのことだけが気になっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9151z/>

The possible world

2012年1月6日19時25分発行